

第7章

事業に対する評価・提言等



はじめに

私は、平成27年度次世代グローバルリーダー事業である第28回「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(以下、SWY28)の団長として、平成28年1月15日の外国参加青年(OPY)歓迎レセプションを始め、海外参加10か国の青年たちと日本参加青年(JPY)、総勢240名あまりと共に、1月27日の国連大学訪問、そして翌28日から33日間にわたる船上研修、そして途中インド・チェンナイ及びスリランカ・コロンボにおける訪問国活動を行いました。また、船上研修直前の1月20日、日本を含む参加各国のナショナル・リーダー(NL)たちと共に、皇太子殿下の御接見、安倍総理大臣への表敬訪問を行いました。

安倍総理からは温かい励ましの言葉を頂戴し、気軽にfacebookに投稿していただきました。また御接見ではとりわけ、皇太子殿下からタンザニアのNLのムッサ・ハジ・ハリファ氏に対し賜ったお言葉に、御接見からの帰途のバスの中で各国リーダーたちから感動の歓声がありました。そのお言葉は「スワヒリ語」で「MILIMA HAIKUTANI BUNADAMU HUKUTANA」だったそうです。その意味はムッサによると「山と山は近づくことはできないが、人と人は出会うことができる」という意味なのだそうです。

このお言葉どおり、今回の事業では、たくさんの各国青年たちが出会い、近づくことができたのです。参加青年(PY)たちの数えきれないほどの生き生きとした表情が、そのことを端的に表していました。

総評

各国のPYには、全体として、相互に交流と理解を深め、将来のリーダーへと共に成長しようとする意欲に満ちた積極性が随所に感じられました。

この事業はJPYと多数のOPYが交流し、相互理解を深め、視野を広める機会として非常に有益であることが実感できた次第です。また、事業の管理部は十分その役割を果たしており、PYたちとの関係も基本的に良好でした。

青年たちは、期間の前半にかけて、自分たちの文化を伝える努力を重ね、世界の多様性を認識しつつ、異なった文化や習慣を理解しようと努めるとともに、様々な船上研修やアクティビティに積極的に取り組んでいきました。初めはぎこちなかった青年たちも、多様なバックグラウンドを持った各国青年と一緒に、アドバイザーによるセミナーや課題別のコース・ディスカッションなどを通して意見交換を重ね、お互いの違いや同じところを知

り、濃密な船上生活を共にする中で、友情を篤くし、着実に成長していったのです。

またインドとスリランカでの訪問国活動は、PYにとって、更に多様な社会の存在を実感し、自国などとの対比だけでは推し量れない社会の現実と課題の発見に寄与したものと思われます。

訪問国活動を終え、期間の後半である帰路に入ると、相互の文化の違いに戸惑い、自らのアイデンティティと今や仲間となった他文化の青年たちとの距離感に戸惑う様子も垣間見られました。しかし、更に船上での生活や議論・行動を共にする中で、しばらくすると多くの者はそれを乗り越え、異なる文化をお互いに尊重しながらも、この研修で培われた異文化対応力やコミュニケーション力によって、相互に自然にやり取りすることができるよう、成長していったと認められました。

事業の進化の大きな柱である、リーダーシップやマネジメント力の向上に関しても、船上生活や様々な活動の自主的な運営やアドバイザーによるセミナー、コース・ディスカッションを通じて総体として涵養されています。なお、この点については、青年間の社会的な活動経験の幅の違いなどがもたらす問題意識の差や、プレゼンテーション能力や英語でのコミュニケーションの実践力の違いなどによって、その成長の度合いには大きな差が生じていることは否めないと思います。特にこの点、JPYの募集広報や選抜、前年の事前研修における実践訓練などが重要であると思われます。

いずれにしても、本事業はPYに強いインパクトを与え、その成長を促し、OB相互のつながりを含め多くの成果を挙げてきていますが、関係者の意見を踏まえ、更に事業に磨きをかけ熟度を上げていけば、次世代グローバルリーダー育成によりふさわしいものとなるよう更に前進させることができると確信しています。以下いくつかのプログラムについての所見を述べたいと存じます。

ナショナル・プレゼンテーション、クラブ活動等

出航後、毎日のように行われた各国のナショナル・プレゼンテーションは、それぞれがとても工夫され、エキサイティングで、すばらしく、多くの感動がPYたち相互に共有されていきました。異なる歴史や文化の下でも、人としての感動は共有され、少しずつお互いを近づけ、相互理解が深まっていく様子がよく分かります。IT能力にもたけたPYは、事業が始まってからの映像などの素材も巧みに取り入れ、リアル感のあるプレゼンター

ションも見ることができました。また、お互いの文化を伝え合うなどの自主的な取組も盛んに行われ、そのための活動時間は、相互理解を更に促進するために極めて有効で、一体感の醸成にとっても役立っていたと思います。

セミナー / コース別ディスカッション

リーダーシップや異文化理解など、重要なテーマによるアドバイザーのセミナーは、PYの意識を高め、自らの成長を促す点において極めて有益なものでありました。成長の過程で生じる意識や感じ方の差も、どうやってその事実を受け入れ、今後にかすかという観点にも配慮され、アドバイザー相互に意見交換をしながら有機的な連携ができるよう適切に対応していただいたものと理解されます。なお、私からも団長講話として現代社会における統計科学の重要性と統計的思考力による社会進化について、「Statistical Science for a Better World」と題した講演を行いました。

また、コース・ディスカッションでは教育、情報・メディア、環境などのテーマごとに事前視察を含め、それぞれのファシリテーターには有意義な成果に結び付けていくために力を尽くしていただきました。その結果、コース・ディスカッショングループの成果はもとより、グループのPYの結束力も高まっている様子がうかがえました。社会経験や問題意識などが多様なPYがいる中でのコース・ディスカッションの運営には多くの困難が伴っています。一方でファシリテーターは管理部業務の遂行の役割も担うことがあることから、ファシリテーターには優れた人材を今後も確保していくことが必要です。と同時に、ファシリテーターの事務負担への配慮や、研修成果をより高めるためのアドバイザーとファシリテーターの総合的な協力が促進されるような時間の確保や仕掛けの工夫をされていくと良いと思います。

訪問国活動

寄港地は、船上での研修成果を踏まえ、各地の多様性の実態と課題などを直接体験できる貴重な時間です。現状かなり盛りだくさんのプログラムが組まれています。PYがそれぞれに現地の実態を感じ、理解する時間的余裕がもう少しあると望ましいのではないのでしょうか。

終わりに

今回のSWY28は、4年ぶりの海外運航となり、船上での生活や様々な活動を共有する時間が充実したことにより、PYは人々が今直面している様々な課題に対し、青年として今何をなすべきかを考え実行することの重要性を学びました。そして何よりも、お互いの交流を通じて、違いのあるお互いの文化への敬意や多様性のある社会の中で生きる喜びを共有し、多くの友情が育まれました。

自分の文化を伝えようとする若者、異文化を学ぼうとする他国の若者、その真摯でフレンドリーな雰囲気のある空間を共有する全てのPYたちが、一体となって喜びを分かち合う姿が何度も繰り広げられ、大いに感動しました。

これらの貴重な体験は、PY一人一人にとってかけがえのない財産になったことでしょう。

このSWY28の航海を共にしたPYたちは今やFacebookなどを通じて交流を続けています。私は、彼らが必ずや地域や国際社会において、未来のリーダーとして、それぞれの目標に向かう航海を自ら計画し、そのプロセスをマネジメントしていくことができると信じています。

何を道しるべとして自らの位置を確認し、進む方向と速度を決めるのか、アプローチの仕方は人様々かもしれませんが、世界各地に分かれてはいても、相互理解の大切さをかみしめ更に交流を続け、社会のために活躍されることを楽しみにしています。

最後になりますが、この貴重な機会を将来を担う若者たちのために提供している内閣府に深く敬意を示したいと存じます。と同時に、自国の青年たちの成長と日本を始めとする多くの国々との友好交流を重視し、青年を派遣していただいた各国、そして訪問国活動でお世話になったインド・スリランカ両国の関係者、またこのSWYの主な舞台である船の運航者、プログラムの運営を担っていただいた管理部など多くの関係者の皆様に心から感謝と御礼を申しあげ、私のまとめと致します。

ありがとうございました。

1. はじめに

平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」（以下、SWY28）は、平成28年1月14日のOPYの来日により幕を開けました。

OPYが表敬訪問や施設訪問、ホームステイなどから成る地方プログラムを国内5地域に分かれて経験しているのと並行して、JPYは東京で出航前研修を行い、1月19日、OPYがJPYに合流する形で、約1週間の陸上研修が始まりました。

1月27日には全PYが横浜港へ移動し、「にっぽん丸」に乗船して、船上研修を開始しました。翌28日、「にっぽん丸」は、たくさんの方々に見送られ、1か月強の航海に旅立ちました。

航海中、PYは船の中で様々なプログラムをこなしつつ、2月9日から12日まではインドにて、また14日から17日まではスリランカにて、訪問国活動を行いました。そして、2月29日、「にっぽん丸」は無事、東京港晴海ふ頭に入港しました。同日に下船したOPYは空港に向かい、それぞれの国へ帰っていき、JPYは翌3月1日にかけて東京にて帰国後研修を行いました。帰国後研修の修了をもって、予定していた全てのプログラムを無事終えました。

今回の事業を実施するに当たり、たくさんの方々にお世話になりました。SWY28は、かつての「世界青年の船」事業の最終年度事業（SWY25）とその後継事業（グローバルリーダー育成事業（GLDP）及びSWY27）を通じ、過去3か年が国内のみの運航だったのに対し、4年ぶりの海外運航となりました。このため、事業実施に向けて、不安もありましたが、多くの方々の御支援・御協力を頂き、お陰さまで大きなトラブルもなく終了できました。

この紙面をお借りして、日本を含む参加各国の政府関係者や事後活動組織の方々、日本・インド・スリランカの各地の訪問先の方々、活動をサポートして下さったボランティアの方々、日本でのホームステイやスリランカでのホームビジットの機会を提供して下さったホストファミリーの方々、船の運航に当たって下さった、管啓二船長を始めとする「にっぽん丸」のクルーと商船三井客船の方々、その他全ての関係者の皆様の御尽力に謹んで感謝の意を表したいと存じます。

さらに、今回のミッション全体の代表として力を尽くして下さった須江雅彦団長、セミナーやカウンセリングをして下さったアドバイザーの4人の先生方、PYの

まとめ役としてリーダーシップを発揮した12人の各国NLの皆さん、そして私を支えてくれた管理部員の皆さんには重ねて感謝申し上げます。

2. 主なプログラムについて

次に、事業期間中の主なプログラムについて、概要と評価を記します。

■ コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは、SWY28におけるメインのプログラムでした。PYは、「地域づくり」「防災」「環境」「教育」「情報・メディア」及び「青年起業」の六つのコースのうち、いずれか一つのグループに所属し、各コースに分かれてディスカッションを行いました。

コース・ディスカッションは計5回行われましたが、日本・インド・スリランカの各地で、コース別の視察が行われたほか、全てのグループが一堂に会し、各国における青年の社会活動の現状について情報を共有する「導入フォーラム」や、コース・ディスカッションのまとめとして、各コースの成果を発表し、他のコースのPYと共有する「サマリー・フォーラム」も行われました。

コース・ディスカッションの進め方は、コースごとに様々でしたが、1コース当たり約40人にもなるメンバーが常に全員でディスカッションするのではなく、例えば、あるミニテーマについて、小グループに分かれてディスカッションし、その後、ディスカッション内容を全体で共有したり、ワークショップ形式で、小グループごとに話し合いながら活動企画を考えて模造紙に記載し、その内容を全員の前でプレゼンテーションする、といったやり方が組み合わされていました。

PYの年齢は18歳から30歳までですが、20代後半の者や社会人も多く、なかには自ら会社を経営している者もいるなど、社会経験の豊富なOPYに比べ、JPYは10代から20代前半の学生が中心で、OPYに比べると社会経験が乏しい傾向にあり、その両者が何度もディスカッションを重ねて、最終的には下船後の事後活動に向けたアクションプランを作成するというのは、難しいものがあったと思います。しかし、サマリー・フォーラムでは、特色あるプレゼンテーションを見ることができ、いずれのコースも充実していたことがうかがえました。特に、情報・メディアコースのPYは、個性的な複数の動画を披露してくれ、非常に印象的でした。

各コースには一人ずつファシリテーターが配され、日

常的な業務を他の管理部員と分担しつつ、コース・ディスカッションの運営に当たりました。「世界青年の船」事業及び内閣府の青年国際交流事業の一つである「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）のex-PY4名を含む今回の6人のファシリテーターは、皆、本事業及びコース・ディスカッションの狙いをしっかりと理解し、工夫を凝らしつつ、コースの効果的な運営に努めてくれました。

■ ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、SWY28の華ともいえるべきプログラムでした。

内閣府の青年国際交流事業は、かつての文化交流中心のプログラム構成から、ディスカッション中心の、より深いところで青年同士が理解し合うプログラム構成へと変遷していますが、一方で、文化交流プログラムのない国際交流プログラムなどあり得ません。その中でも、ナショナル・プレゼンテーションは文化交流プログラムの粋であり、間違いなくSWY28のハイライトの一つと言えます。

各国、45分間の持ち時間の中で、自国の歴史や文化、現在の社会問題などについて、演劇や芸能の披露といったPYによるパフォーマンスに、時には映像を交え、工夫の凝らされたプレゼンテーションがあり、各国とも準備や練習に相当の時間と労力を費やしたことが感じ取れました。

NLを含め、JPYが約120人の大所帯であるのに対し、OPYは各国多くても12人しかいませんでした。JPYのプレゼンテーションは内容が多彩で、かつ人数をいかにしたパワフルなものであったのに対し、各国のプレゼンテーションも内容の多彩さという点では負けていませんでした。そして、各国の個性的なプレゼンテーションを堪能することで、PY同士の、あるいは国同士の相互理解に役立ったことは間違いありません。

一番印象的だったのは、いずれのナショナル・プレゼンテーションでも、終了後に、観客である他国のPYが、舞台から観客席に下りてきた演者たるPYを迎え、パフォーマンスを労い、称えつつ、200人以上のPYが一体となって歌ったり、踊ったりする様子が見られたことです。まさに、各国のPY同士が一つになっていました。

■ アドバイザーによるセミナー

コース・ディスカッションが縦糸だとすれば、アドバイザーによる三つのセミナーは横糸に当たるものでした。「異文化理解」「リーダーシップ」そして「プロジェクトマネジメント」は、下船後の事後活動を考えるに当たって必要であり、この三つのテーマに関するセミナーが開催されました。

アドバイザーによるセミナーは、全てのPYを一堂に集めて行われましたが、単なる講義に終始することではなく、少人数のディスカッションとその内容の全体での共有を交えるなど、3人のアドバイザーの先生方は、いずれも趣向を凝らした運営をしてくださいました。

各セミナーは、異文化理解セミナーが計3回、リーダーシップ・セミナーとプロジェクトマネジメント・セミナーが計4回ずつ行われましたが、各先生とも、PYからの申し出に応じて補講を行うなど、PYの理解が深まるように尽力してくださいました。

■ 事後活動セッション

PYが事後活動について考察する「事後活動セッション」は、途中から乗船してきた3人の「世界青年の船」事業のex-PYが運営の中心になって、船上研修の終盤に2回開催されたプログラムでした。

内閣府の青年国際交流事業の特色の一つは、PYが、事業を通じて得られた知見や経験、人的ネットワークを活用して、事業終了後、各国で、あるいは国境を越えて、様々な社会貢献活動を行うことです。

SWY28に参加した各国には事後活動組織が存在し、PYは下船後、事後活動組織として、または独自に事後活動を行います。

しかし、PYにとって、自身が行う事後活動について、具体的なイメージを持つのはそれほど容易なことではないでしょう。

その点、事後活動を実際に行っているex-PYと接し、ワークショップなどを通じて、事後活動について考察することは、PYにとって有意義な機会だったと思います。

また、SWY28の12人のNLのうち9人は「世界青年の船」事業のex-PYで、管理部員の中にも、ファシリテーター以外に4人、「世界青年の船」事業のex-PYがいました。PYのロールモデルになり得る者が身近に多くいた今回のSWY28は、PYにとって恵まれた環境だったと言えるのではないのでしょうか。

■ PYセミナー、文化紹介（クラブ）活動、自主活動

PYが自主的に企画した活動として、PYセミナー、文化紹介（クラブ）活動、自主活動がありました。前二者がスケジュールの中で正式に時間が割り当てられていたのに対し、自主活動は空き時間などを利用して行われました。

PYセミナーは、PYが自身の活動経験や専門知識をいかして行ったもので、計3回の機会に、様々なテーマのセミナーが開講されました。セミナーを主催する者以外のPYは、各回、いずれかのセミナーに参加しました。

クラブ活動は、自国の文化を伝えるため、PYがイニシアチブを取る活動の一つであり、各国の様々な文化、

芸能をテーマとした活動が行われました。船上研修中に3回、活動の時間が設けられ、事業終盤には各クラブのメンバーが、成果を発表するエキシビションが開催されました。

自主活動は、PYセミナーやクラブ活動以上にバラエティに富んでおり、とても一言で全体像を言い表せませんが、これらPYセミナーやクラブ活動、自主活動を通じて、企画力やプレゼンテーション能力、リーダーシップを磨き、また、PY同士の友好や相互理解が深まったことと思います。

■ 訪問国活動

今回、訪問国活動が行われたのは、インドのチェンナイとスリランカのコロンボでした。

チェンナイはインドで第4位の人口を誇る都市で、コース別課題別視察やインド伝統文化の教授施設であるカラクシェトラ芸術学院訪問、ラジブ・ガンディー国立青年育成機構（RGNIYD）訪問、各種レセプションなどが行われました。RGNIYDでは現地青年とのディスカッションが行われ、PYにとって貴重な経験になったことと思います。

また、コロンボはスリランカ最大の都市であり、コース別課題別視察や国家青年サービス評議会（NYSC）訪問、ホームビジット、船上レセプションなどが実施されました。NYSCでは武道やスポーツを通じた現地青年との交流などが行われ、また、ホームビジットでは、都市部から少し離れた村の御家庭にPYが分かれておじゃましました。船上レセプションには、スリランカ民主社会主義共和国マイトリーパーラ・シリセーナ大統領がお越しくださるという、大変名誉な機会にも恵まれました。

さらに、両国への寄港の際には、新聞やテレビなど、現地メディアが、訪問国活動について大きく取り上げました。

3. 全体を通じて

SWY28全体の個人的な印象、特に、私がSWY28直前の前年秋に、管理官として乗船した平成27年度「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP42）と比較して感じたことをいくつか記します。

SSEAYPとSWYに連続して乗船する機会に恵まれた管理官はそれほど多くありませんし、私自身、その違いについて問われることがよくあったことから、ここで若干の記述をすることで、参考にさせていただけるのではないかと思います。

SSEAYP42は、日本と東南アジア10か国の計11か国、約320名の青年が、日本でのプログラムの後、船上でコース・ディスカッションやナショナル・プレゼンテーションなどの各種プログラムをこなしながら、フィリピン、ベトナム、ミャンマー及びマレーシアに寄港

し（ベトナム滞在中、代表団のみ航空機でラオスも訪問）、日本に戻ってくるという、41日間の航海を中心とする国際交流事業でした。

SWY28もSSEAYP42と同様、船上でのプログラムを中心とした、各国の青年を対象とする国際交流事業ですが、両者から得た印象は全く違っていました。

両者の印象を一言で言い表すと、SSEAYP42が「規律、様式美、アジアの一体感から生まれるパワー」だとすれば、SWY28は「自由、モザイクの美、世界規模の多様性から生まれるパワー」でした。これはどちらが良いというものではなく、私はどちらも素晴らしいと感じました。

SWY28は、とにかく自由でした。ミッション全体として、PYの自主性を最大限尊重し、PYを大人として扱い、PYの自己責任・自己管理に委ねようという精神に満ちていました。

SWY28とSSEAYP42の雰囲気の違いを端的に表す例として、就寝時間があります。

両者とも、船上での就寝時間は23時でしたが、SSEAYP42では、毎晩23時までに全てのPYが各自の船室に戻っていました。23時になると、各国のNLが、船室外に出ているPYがいないか、ナイトパトロールを行いました。

一方、SWY28は、PYが各自の船室に戻る時間は自由でした。翌日のプログラムに差支えない範囲で、PYが自己管理をしていました。船内のいろいろな場所で、毎晩、PY同士が語り合い、相互理解と友好を深めていました。中には、あまりに遅くまで語り合って、翌朝の点呼時に眠そうにしているPYもいました。

また、SSEAYP42の場合、参加各国はそれぞれ異なる歴史や文化などを有しており、多様性に富んでいたのですが、一方で、日本を含め、皆アジアの一員であるという共通性を、ミッション全体が感じていました。

これに対し、SWY28の参加各国、PYは本当に多様でした。一人一人が違う色を持っていましたが、様々な色が集まることで、全体としてモザイクのような美しい絵ができあがっていたと思います。

私は、平成27年7月末に、青年国際交流担当の内閣府参事官に着任しました。そして、28年4月の初めに、内閣府内の別の部署に異動することになりました。わずか8か月間の在任期間でしたが、幸運にも、SSEAYP42とSWY28という2種類の、船を使った青年国際交流事業に管理官として参加することができました。

以前から、船を使った青年国際交流事業は、人材育成、相互理解と友好の促進、人的ネットワークの構築のいずれの面でも効果が高いということを、事実としては知っていました。参加各国には事後活動組織が設立され、ex-PYは世代を超えて、新たなPYへの支援や在外

日本公館とのコラボレーションを含め、社会貢献活動を活発に行っています。

今回、船を使った青年国際交流事業に参加して、事業のすばらしさを体験できました。

効果が高い要因としてはまず、非日常的な空間ということが挙げられるでしょう。10か国以上の、年齢も幅がある数百人の青年が何十日も寝食を共にするなど、なかなかある機会ではありません。

そして、船上という、離れたくても離れられない、インターネットもつながらないという、物理的にも精神的にも逃げ場がなく、船室は他国のPYと3人で共有という、寝ている間以外は常に国際交流という環境が、効果を高めていると考えられます。

さらに、船に乗って皆で複数の国を訪問するということが、いわば運命共同体という意識を生みだし、PY同士の一体感を高め、長く続く人的ネットワークの構築に一役も二役も買っていると感じました。

加えて、船が参加時の良い思い出の象徴になっており、この共通のアイコンを有していることが、各国で世代を超えてex-PY同士を結び付けているのだと実感しました。

私自身、SSEAYP42では、管理官として、かけがえない経験をしました。SSEAYPのex-PYはよく、“SSEAYP changed my life”と言いますが、私自身の人生も、SSEAYP42に参加することで変わったと思います。私もPY同様、SSEAYP Familyの一員になりました。

そして、SWY28に参加し、私は貴重な体験を更に重ねることができました。きっとSWY28の多くのPYも、人生が変わるような経験をしたことでしょう。SWY28のPY同様、今や私はSWY Familyの一員でもあります。世界中に様々な年齢の友人がいます。

青年国際交流担当の内閣府参事官のポストを離れることで、私の事後活動が始まります。過去の管理官には、内閣府青年国際交流事業を、いろいろな形で長く応援している方がいらっしゃいます。私もそのような先輩方を見倣って、内閣府の青年国際交流事業が、今後も引き続き発展していけるよう、自分なりの方法で継続的に関わっていきたいと思います。

アドバイザー評価

榎本 英剛

私は前年度の事業でリーダーシップ担当の研修講師を担当させていただいたのに引き続き、同じリーダーシップ担当のアドバイザーとして本年度の事業にも関わらせていただいた立場から、両事業の比較という観点も交えながら感じたことをここに記したいと思う。

本年度の事業が前年度の事業と大きく異なったのは、事業期間、特に船上での研修期間が大幅に長くなったことである。また、プログラムの組立てについても前年度の反省を踏まえ、私自身が提案させていただいたものを含めていくつか新しい試みを行ったので、この報告書ではそれらについての考察も行いたい。

以下、私が担当したリーダーシップ・セミナーについて、アドバイザーの役割について、全体のプログラムについてと三つに大きく分け、それぞれの良かった点、今後改善できる点について所感を述べる。

1. リーダーシップ・セミナーについて

■ 良かった点

前年度は事業期間が短かったこともあり、私自身が担当したのは最初の陸上研修における一コマ（2.5時間）だけであった。仮にも「グローバルリーダー養成」を謳っているプログラムでこの時間数ではいかにも少ないということで今年度は3コマを頂いた。その結果、前年

度に比べると自分が伝えたいことがかなり伝えられたように思う。

本年度のリーダーシップ・セミナーは各回以下のようなテーマで構成した。すなわち、1回目のセミナーは「自分の力を引き出す」、2回目は「他者の力を引き出す」、3回目は「世界の力を引き出す」、そして4回目はリーダーシップ委員会に属するPYたちに企画してもらった。私はリーダーシップとは自分から始まるものだと考えており、自分が何者で、何を大事にしている、自分の人生にどういう意味を見出しているかがリーダーシップの源泉だと信じている。その上で、自分が成し遂げたいことが自分だけの力では成し遂げられない時、他者と力を合わせ、他者の力を引き出すためのスキルが必要となってくる。さらに、グローバルリーダーを目指すのであれば、ただ単に外国語が話せるというだけでなく、世界で今何が起きているかを知り、それについて自分にも何かできることがあると信じ、実際に行動を起こすことが必要である。この「自分→他者→世界」と段階的に意識する範囲を広げていったことは構成としては良かったと思う。

また、複数回のセミナーを提供する機会があったことで、あるセミナーでやった内容を次のセミナーまでの間に意識的に実践してもらい、次のセミナーの冒頭で実践

した結果何を学んだかについて振り返りをするという「学習のサイクル」を回すことができたことも良かったと思う。

もう一つ良かった点は、委員会メンバーが企画した第4回のセミナーで実施したオープン・スペース・テクノロジーがことのほかPYからの評判が良かったことである。実はいくつかのコース・ディスカッションに呼んでもらった際に実施してみたところうまく機能したので、私の方から委員会メンバーに提案したのだが、これはPYたちの自発的なリーダーシップを引き出す上で有効な手法だと感じた。

■ 改善できる点

3回目のリーダーシップ・セミナーが終わった後に非公式にとったアンケートに書かれたコメントを見ると、全般的には好評価だったものの「内容が基本的過ぎる」「より実践的な内容にしてほしい」「もっとPYの持っているものをいかしてほしい」などのコメントも見られた。これらのコメントはもっともな部分があり、今後もし本事業に関わる機会があれば、4回目のセミナーでやったような、よりPY自身が主体性を発揮できるような機会をもっと早い段階で提供すべきだと反省した。

また、リーダーシップ委員会メンバーの参加意欲にかなりばらつきがあり、ミーティングもなかなか機能しなかった。そもそも仕組み上、必ずしも自発的に参加しているわけではないので仕方がない部分もあるが、自分自身彼らを十分にエンパワーできなかったのが心残りである。

2. アドバイザーの役割について

■ 良かった点

前回の反省点として、セミナー以外の場面でもっとPYの力になりたかったというのがあったため、今回は初めにその意図を明確に伝え、主に食事の時に積極的に声をかけてくれるよう働きかけた。その甲斐もあって、今回の事業ではほとんどのPYと話をすることができた。リーダーシップ・セミナーで話したことで分からなかった点について確認してくれたり、自分の活動やキャリアについて質問してくれたり、個人的な悩みについて相談してくれたり、少なからず彼らの学びと成長に寄与できたような気がする。

また、事業の中盤であったアドバイザー・セミナーで話したトランジション・タウンという市民運動についての話が予想外にインパクトを与えたようで、その後その話に刺激を受けた活動が船の上で立ち上がったりしたこともうれしい驚きであった。この活動は自分が提唱する「出番型リーダーシップ」の実践的な事例でもあるので、事業のもっと早い段階で話しても良かったと感じた。

さらに、前回の反省点として、ファシリテーターの人たちとあまり絡めなかったというのがあったが、今回は全てのコース・ディスカッションに顔を出し、そのうち何度かはファシリテーターの求めに応じてセッションを持たせてもらったりしたことあって、前回に比べるとうまく自分を使ってもらったという感じがする。

■ 改善できる点

前回に比べるとかなり改善が見られたとはいえ、アドバイザーとファシリテーターの連携についてはまだまだ改善の余地があると感じた。具体的には、本研修が始まる前の段階での連携を強化するために、アドバイザーが夏のファシリテーター会議に参加したり、逆にファシリテーターが秋の事前研修におけるアドバイザーのセミナーに参加したりするなどして互いの理解を深めること。また、本研修が始まってからも、日々アドバイザー及びファシリテーターの合同会議を行い、互いの情報共有や相互支援を促進することなどが考えられる。

また、食事の時にいろいろなPYと話ができたのは良かったのだが、特に現在の活動やこれまでのキャリアなどについて同じような質問を何度も受けたので、事業の早い段階でそのようなことを気軽に聞けるQ&Aセッションのようなものを自由参加形式で持てるといいのかもしれないと感じた。

さらに、トランジション・タウンの活動はこの船を一つのコミュニティと見立てた時に応用できることがいくつかあると感じたので、その可能性についても引き続き探求してみたい。

3. 全体として

■ 良かった点

まず何よりも、久しぶりの海外航路であった今回の事業において、大きなトラブルもなく、順調に全日程を終えることができたことが良かったと思う。これはひとえににっぽん丸のクルーの皆様、管理部の皆様、そしてPYの皆様の誠実な努力のお陰であり、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。

プログラム面では、前回の反省を踏まえてコース・ディスカッションの一つのテーマであった異文化理解をリーダーシップとプロジェクト・マネジメントと並ぶ柱にしてそれを縦軸とし、六つのコース・ディスカッションを横軸として両者の連動を図るということを今回のプログラム・デザインの基本としたが、それは完全とは言えないが、かなり機能したように感じる。

そして、これまた前回の反省を踏まえ、今回はほぼ毎日夕方にレター・グループ単位での振り返りの時間を持てるようにしたが、PYたちに聞いてみると、これは単に振り返りの場としてだけではなく、彼らが安心できる拠り所としてもかなり機能したようである。

これらの複合的な成果もあり、前回の事業に比べてPYの成長度はかなり高かったように感じる。特に、前回は船上研修の期間が約2週間と短かったため、PYが当初の表面的な会話から、より深い本質的な対話へと移行する前に事業が終了してしまった感があるが、今回は船上研修が10日間を過ぎた頃からその移行が起り始め、そこで異文化コミュニケーションやリーダーシップで学んだことを実践する機会が増えたことで、さらに成長曲線が上昇カーブを描くことができたように感じる。

■ 改善できる点

今回の事業で一番痛切に感じたのは、JPYとOPYの間に横たわる英語力や問題意識の溝がいかに大きいかということである。このことはこれまで事業期間が短かった時にはそれほど表面化していなかったが、今回は事業期間がかなり延びたことでその差が看過できないレベルに達していることが浮き彫りとなった。もちろん、個人差はあるが、このままではプログラムの質が低下するとともに参加諸国の日本や日本人に対するイメージが低下する恐れがあると感じる。名称のとおり、次世代のグローバルリーダーを本気で育成するのだとしたら、その名に

恥じないプログラム内容及び参加者の質を担保する必要があるのではないだろうか。

具体的には、JPYの特に英語力に関する合格基準をより厳しくし、その基準に満たない者はたとえ定員割れしたとしても選ばないようにすることを提案したい。併せて、社会人経験者の割合を増やすべく、企業向けの説明会を実施したり、広報ツールをアップグレードしたりすることなどを検討したい。

さらに、よりPYの自発性や当事者意識を引き出すようなプログラム・デザインや運営の仕方が必要だと思われる。具体的には、こちら側から提供するプログラムの数を厳選し、PYが中心となって企画できるプログラムや自主活動の時間を増やすこと。いくつかのプログラムを同時に行い、PYがそれに参加するかを自由に選べるような機会を増やすこと。そして、委員会活動なども強制的ではなく、より自発的に参加できるようなやり方にするといったことが考えられる。運営面でも、NLやAGLなどを中心に運営する体制とし、問題が起きても自分たちで解決策を考えさせ、管理部はあくまでもそれをサポートするという立場をとることが望ましいと思われる。

異文化コミュニケーションのアドバイザーとして

マイク・マツノ

私は異文化コミュニケーションのアドバイザーとして、今回のSWY28へのPY約240名に対して3回のセッションを行いました。最初のセッションはNYCで行い、2回目と3回目は船上で行いました。アドバイザー・セッション（233名のPY対象）、情報・メディアコースのディスカッションでアメリカの映画やイメージについて論じ（40名対象）、「スモール・トーク」セッション（50名対象）を行いました。

セッション1

NYCで行われた最初のセッションは、概ねうまくいきました。しかし、JPYには私の話すスピードがあまりにも速く、何度もゆっくり話してほしいと言われた後でもまだ速すぎて、JPYの多くは理解できませんでした。OPYにとっては問題なく、事実、OPYの中には、私の話すスピードは、集中して聞き続けられるので好きだと言った人もいたのです。アドバイザー・ファシリテーター・ミーティングで以前にも話し合いましたが、SWY28ではJPYとOPYの英語のレベルにはかなりの差があり、乗り越えるには相当のギャップがありました。アドバイザーやファシリテーターにとって、英語力に差があると、テーマを深く掘り下げて、全員にとってためになるような真に有意義なディスカッションをするの

は非常に困難になることを私は知っています。これはJPYの募集方法にも直接関係がありますが、JPYの約8割が大学生ですが、OPYはもっと年齢が上で、専門職に就いていたり、既に社会人であったりすることに起因します。差というのは英語だけでなく人生経験や職業経験においても見られました。アドバイザー・セッションやコース・ディスカッションでPY同士をペアにして、ディスカッションやアクティビティをさせると、JPYのほとんどがレベルの高いディスカッションについていけなかったり、話に入れなかったりし、OPYの多くは退屈するか、ディスカッションやアクティビティをただ適当にこなすようになるだけだったりしました。NYCでの最初のセッションで、認識と期待（perception and expectations）について話しました。これは全体的にOPYには理解されたと思いますが、同じセッションを9月に日本語で行っていたにもかかわらず、いったい何名のJPYがこの概念を理解できたのだろうかと思いました。

セッション2

2回目のセッションは乗船して1週間後に行われました。食事の時間にJPYやOPYと話したところ、彼らの間には、コミュニケーションをしたり、交流をしたりする

点で依然としてギャップがあり、私が当初話そうと考えていた異文化コミュニケーション理論とその適用についての話は、OPYの大半にとって有意義でないことが分かりました。それで、パワーポイントを全て作り直し、日本人の価値観と日本人が望んでいる事柄に焦点を当てるようにし、OPYがJPYを理解する助けになればと思い、日本人のコミュニケーションや振る舞い、行動の仕方の理由を説明しました。また、JPYにもじっくり考えて気付いてほしかったのは、様々な状況で日本人の価値観というDNAゆえに自分たちがどのような反応をし、それが異文化交流においてどのような影響を与えているかということです。非常にシンプルではあるものの重要な点として、なぜ、日本人はキャビン内である特定の方法でコミュニケーションをしているのか説明する日本の文化的価値観について強調しました。例えば、なぜ「沈黙」は日本人にとって受け入れやすいことであり、誰も話さないのは良くないことだとはみなされていないのかについてです。

要するに、私はOPYとJPY双方にとって船上でのコミュニケーションや交流がもっと楽で効果的になるように努力しました。2回目のセッションの後半で、高コンテキスト文化と低コンテキスト文化について、また、コミュニケーション・スタイルの違いによって、相手に対して期待する反応が非常に異なることについて話しました。しかし、私が強調しようとしたのは、全ての人が高コンテキストや低コンテキストに当てはまるわけではなく、これは一般論に過ぎないということでした。しかし、これらを出発点として用いることはできますし、船上でOPYとJPYが交流し、コミュニケーションをし、共に生活をしていく中で、うまく調整していくことができます。

セッション2もだいたいはいうまくいったと思います。コース・ディスカッション、アドバイザー・セッション、そして私の2回目のセッションに対して行った評価でいくつかのコメントがありました。一人のJPYは、日本人の価値観について私が話したことは全てもう知っている、他の文化について知りたいと言いました。彼は私が話したことを既によく知っており、きちんと理解した数少ない人の一人だと思います。2回目のセッションに関して、JPYが船でもっと成功を収めるには何が必要かについて平井康仁先生と何度も話し合いました。先生は、JPYのうち必要としている者に対して、特別な「スモール・トーク」セッションを実施できるかと私に尋ねられました。

「スモール・トーク」プレゼンテーション

最初は、そんなトピックやセッションがそれほど必要だとは思っていませんでした。結局、この時点で既にプログラムの半分が終わっていましたが、船上での後半が

始まっていたからです。しかし、平井先生はJPYの多くが先生にこのトピックについて尋ね、「スモール・トーク」セッションをやりたいと言っていたとおっしゃいました。それで、私は「スモール・トーク」プレゼンテーションを行うことにし、JPYを助けたいと思っている5名のOPYを募り、プレゼンテーションの後半に来て、JPYの交流の仕方や英語について感じたり考えたりしたことを述べてくれるように頼みました。また、JPYがOPYに話しかけ、質問できるような「スピード・デート」といったスピーキングや交流の活動を最後に行うように計画しました。

私は8名から12名のJPYが参加するだろうと予測し、5名のOPYがスピーキングのアクティビティに来てくれるので、OPY1名に対してJPY2名を組み合わせ、必要なら自分も加わるつもりでした。しかし、実際に生じたことは、大変驚いたことに、およそ50名ものJPYが「スモール・トーク」プレゼンテーションを聞きに来たのです。私は嬉しくもあり、残念でもありました。嬉しかったのは、大勢のJPYがプレゼンテーションを聞きに来てくれたことです。しかし、一方で、この非常に基礎的な「スモール・トーク」プレゼンテーションにこんなにも大勢がやって来たのは、こんな基礎的なレベルのコミュニケーションや交流に船の上の誰もが適応しなければならなかったかと思いました。しかし、私は間違っていたのですが、「スモール・トーク」プレゼンテーションは実際にはJPYの多くにとってとても重要なことだったのです。二人のJPYがプレゼンテーションの最後に泣いていて、「スモール・トーク」の仕組みについて、何を知り、何をし、何を理解すべきなのか、また、OPYの多くは、JPYとの交流について本当のところはどんなことを考え、どんなことを感じていたのか、やっと分かったというのです。

5名のOPYに加え、更に4名のOPYにも聞きに来てくれるように頼んでいました。私のパワーポイント・プレゼンテーションの後、7名のOPYが話をしてくれたのですが、JPYがOPYの話をきちんと理解できるように橋本彩子さんに日本語に通訳してもらいました。JPYの数があまりにも多かったので、「スピード・デート」のアクティビティをすることはできませんでしたが、想定より多くのOPYがグループに話をしてくれたので、結局、時間的にもこのアクティビティをすることはできませんでした。

OPYは皆JPYを励まし、真摯な努力をほめました。この「スモール・トーク」プレゼンテーションに来る勇気があった人たちは、どうすれば自分たちが成長できるか、更に多くを知ることができたのです。プレゼンテーションが終わると、ハグし合ったり、涙を流したりする者が大勢いて、JPYとOPYは意欲を新たにしました。プレゼンテーション後の数日間、NLミーティングでメキ

シコのNLが述べたように、「スモール・トーク」セッションに参加したJPYは、その後、OPYと交流しようと更に努力していました。更に付け加えたいのは、船で交流し、成功を収めるだけの能力がないのは彼らの問題ではないということです。最低限の英語力のないJPYを受け入れてしまうことを選考段階で避けるべきなのです。

私の提案は、JPYを対象とした9月の事前研修で「スモール・トーク」プレゼンテーションをすることと、乗船前にJPYのみを対象とした別のトレーニングを実施することです。そして、乗船1週間後に、更にサポートが必要な者にはフォローアップを行います。このことはあまりにも基本的なことであり、JPYがOPYとコミュニケーションをし、交流するためには不可欠なことでありながら、対応されていなかったことです。過去にも同じような問題が、あるいは今年よりもっと深刻な問題が生じていたのではないのでしょうか。

セッション3 リエントリー

3回目のセッションで、リエントリー（訳注：元々自分が所属していた文化・社会へ戻ること）と逆カルチャー・ショックについて話しました。スタッフによると、私の英語のスピードが落ちて、3回のセッションのうち一番ゆっくりだったそうです。しかし、それでも、JPYの大半は彼らの英語のレベルではせいぜい50%から70%理解していたにすぎないと思います。このセッションはかなりうまくいって、JPYが読めるように文字付のスライドを使ったので、JPYは楽についてこれたと思います。後に、多くのPYから何度も言われたのですが、特に二人のNLが「SWY後の生活」について話してもらえて良かった、と言いました。彼らがPYだった時には、リエントリーや逆カルチャー・ショックについての話は全くなかったので、当時、帰国したすぐ後は大変だったそうです。もっと多くのことを知っていたら、帰国した時のことをもっと現実的に考えられたはずだったからです。

提案

付け加えたいのは、アドバイザーにとって、3回のセッションを240名に対して実施するのは非常に困難で、かつ、時間の使い方としても、アドバイザーの活用の仕方としても最善の方法ではないということです。特に英語のレベルが多様で、教育背景、社会人経験や人生経験がまちまちである240名の集中力と興味を2時間45分にわたって保つのは実現不可能です。私の提案は、アドバイザーは、240名全員を対象にオリンピックセンターで主な導入セッションを1回実施し、その後は、PYが出席したいものを選べるアドバイザーによる小規模ワークショップ・セッションの数を増やすことです。PYは他のアドバイザー、他のワークショップに行くこともできます。つまり、アドバイザーの最初のメインのセッションの後は強制ではなくなり、PYは自分が参加したいものを様々なワークショップから選ぶことができるようになるのです。これら小規模ワークショップ・セッションには人数の上限を設け、最大30名~40名とします。様々な文化や背景、教育、年齢、そして非常に重要な点ですが、様々な英語のレベルの240名ものPYを前に話をするというのは、必ずしも効果的な学びの場とは言えません。このような形式でプログラムを実施すると、得られるものがほんの少しで実質的なものがないか、あるいは自国に持ち帰るほどの実際的な価値のあるものがないかです。PYには自分が学びたいと思うものを選ばせることによって、アドバイザーとPYの双方にとってメリットがあります。

最後に

私の3回のセッションと、加えてスモール・トークとアドバイザー・セッションは、英語のレベルの問題という環境の下でもうまくいったのですが、私がしたいと思っていたほど多くのJPYを援助することができなかったように思います。

結論としては、プログラムの組立て方、人員配置、そして運営方法についての変革が必要です。もし、私がお役に立てるのであれば、比類のない、世界に誇るグローバル・リーダーシップ・プログラムとなり得る可能性を秘め、その器もできている現在のSWY事業を改善するために、喜んでお話ししますし、協力します。

プロジェクトマネジメント・セミナー担当 講師評価

岡田 尚美

1. セミナーの意図

今期の事業の大きな目標の中で、担当セミナーの目的を次のように設定しました。

- (1) 事後活動としてプロジェクトを立ち上げるPYのために、プロジェクトマネジメントの基礎力を付ける。基礎力とは、プロジェクトとマネジメントの基礎概念を理解するとともに、プロジェクトの計画作成方法を、演習を通じて習得すること。
- (2) 事業の中心目的であるPYのリーダーシップ力の向上のため、マネジメントの他、リーダーシップ及び異文化理解の二つのセミナーと六つの課題別コースが組み込まれているので、これらのアドバイザーやファシリテーターと連携を取り、相互に内容を補完すること。

そのため、セミナーの実施の考え方は以下のとおりです。

- (1) 講義の内容は、基礎的マネジメント理論とプロジェクト計画作りとする。
- (2) 計画作りの方法は演習を通じた方が、より効果的に学べるので、事例を使った演習を組み合わせる。
- (3) 計画作りの方法の講義では、細かいマネジメントの手順は説明せず、大枠と方向性を示した中で自由な発想で、グループ演習を行ってもらう。

2. 担当講義内容

実際に行ったセミナーは以下のとおりです。

日時 / 場所	タイトル	内容
9月16日(オリンピックセンター) 事前研修	プロジェクトマネジメント(概要)	1月からの4回のセッションの基礎となる考え方、概要(日本語)
1月25日(オリンピックセンター) セッション 1	プロジェクトマネジメント(導入)	プロジェクトマネジメントの概要と4回のセッションの内容について説明した。
2月3日(船上) セッション 2	プロジェクトマネジメント (概要と問題分析演習)	ペアグループによる演習と事例を使った問題分析演習を行った。
2月7日(船上) アドバイザー・セミナー	「自分の人生を管理するのは可能ですか?(Is it possible to manage our own life ?)」	・プロジェクトと人生のマネジメントの相関性 ・自分の経験 ・リベリア保健プロジェクト
2月18日(船上) セッション 3	プロジェクトマネジメント (問題分析続きと目的分析演習)	問題分析を続けて行い、その分析に基づき目的分析を行った。
2月25日(船上) セッション 4	プロジェクトマネジメント (計画作り、発表)	セッション 3までの分析を通じ、プロジェクト計画作りとグループ毎の発表、振り返り

この他、補講を希望する主にJPYのグループへの支援を3～4回(依頼があった数人のグループに対し)行い、個人からの質問に自由時間に答えました。アドバイザーからPYの補講の時間は、特別に設定はしませんでした。

3. 参加青年のプロジェクトマネジメントに対する反応

セッション 3の後に実施された内部アンケートで、プロジェクトマネジメント・セミナーについて以下のようなコメントがありました。

全体の反応：多くがプロジェクトマネジメントの重要性は分かっているが、講義が難しく、分からなかった、面白くなかった、繰り返しが多かったというものです。このような意見は主にOPYから多く、JPYからも難しく、何をしようとしているのか、分かりにくかったというものでした。ログフレーム

(計画の概要表) についてはその構成要素のアウトプットと活動の違いが分からないという意見もありました。

他のセミナーと課題別コースとの関係：プロジェクト計画作成方法を課題別コースでも活用し、また、リーダーシップや異文化理解を元に、事業終了後の活動に役立てたいという意見がありました。

セミナーの構成：PYの自主性を重視し、マネジメントの枠のみを示し、自由に考えてもらおうとしたことは、プロジェクトという概念の無いPYにとっては、考えるすべがなかったようで、迷ったとの意見がありました。一方、前のセッションの振り返りや確認部分を繰り返しと捉え、重複が目立ち、退屈だった

との意見もありました。4回のセミナーは1回ずつがプロジェクト計画作りの過程に沿って順番に進められ、最後に計画が出来上がるという構成でしたが、セッション間に1週間以上時間が空き、前回の結果を思い出すことから始めることに繰り返しとの印象を持たれたように思います。

グループ議論：20名以上からなるレター・グループでは、分析のために議論がしにくく、グループの議論を進めるためのファシリテーション力も課題であるとの意見がありました。

事例：今回取り上げた日本の各地で問題になっている人口減少や高齢化については、日本の問題を、また自分の地元の状況が理解できたとの意見もある一方、もっとPYの身近な問題あるいは、「にっぽん丸の食糧廃棄」などの共通の問題を取り上げてほしいとの意見もありました。

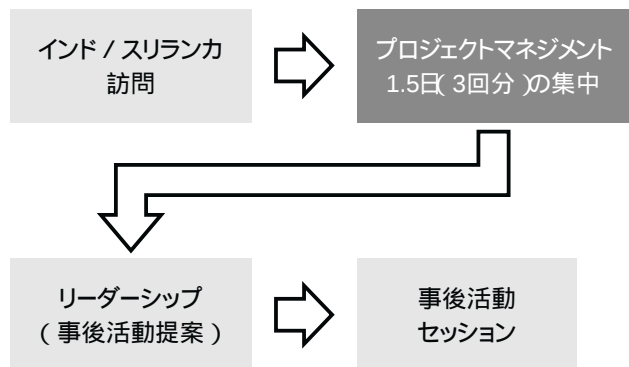
4. 参加青年の変化

当然ながら、240名のほぼ全員が初めてこのような研修に参加するのですから、PYの中で戸惑いや不安があったのだと思います。研修開始時の印象では、特に日本人だけが静かでおとなしい印象ではなく、誰もが期待を含ませながら自分の立ち位置を図っているような気がしました。そして、航海に出て1週間もすると英語の能力の優位性か、特に、英語を母国語とするPYの積極性が目に付きました。自分の専門をいかしながら既に社会で仕事をしている自信に基づき、もっと研修や船上の活動に関わりたい、という気持ちが見えてきたように思います。2週間目も終わり頃になると、自主的に自分の持っている情報（自国の紹介等）を発信し、仲間を募りながら、一緒になって知識を深める独自の活動提案（資源保護等）が、主に、OPYからたくさん出されるようになりました。これらの独自活動が活発になることで、私は、予定されている研修プログラムに支障が出ないか、心配になりました。しかし、彼らから出されるこれらの様々な提案が、SWYのリーダーシップ研修の指標の一つになると途中から確信しました。3週間目の中頃から、どちらかというおとなしい印象のJPYも、壇上で自分たちの得意な分野で発表したり、活動の提案をしたりする人がたくさん出てきました。また、最初から目立った者以外のOPYからも、独自の活動提案が増えてきました。これは、リーダーシップや異文化理解セミナーや、他のPYから触発された結果のリーダーシップの発現であり、SWYの大きな成果であると評価できます。

5. 改善提言

■ プログラムの構成

プロジェクトマネジメント・セミナーは全体プログラムの後半に置くのが良いと思います。訪問国活動の後、そろそろ帰国が頭を過る頃、また、リーダーシップと異文化理解が進んだ頃に集中して行うのが良いかと思います。今回2度にわたって行われた事後活動セッションとの連携も、二つのセミナーと課題別コースとの連携と同様に重要になるので、プロジェクトマネジメント・セミナーはこの事後活動セッションの前に、一通り終わっておき、学んだ方法論を使って、事後活動の計画を立ててもらおうという流れです。来年の事業は訪問先も変わってしょうが、今回のプログラムを例にすると、オリンピックセンターでの概要説明での1回目のセッションはそのままとし、残る3回のセッションは以下のように集中講義にすることを提案します。



■ 事例

この事例は、上記の1.5日で理論や手順をきちんと理解してもらうシミュレーション用の事例を指します。事例を使い、理論を確認しながら、プロジェクトマネジメントを学ぶことは大変効果が高いことが知られています。今回、JPYに自分の故郷の事例を作ってもらいましたが、方法論を学ぶ前に作ってもらうことに無理があって、本人たちを困らせてしまいました。やはり、事例はこの研修用にアドバイザーが作るのが良いと思います。身近な船での暮らしなどを例にすることもできますが、問題分析や目的分析ができるような資料作成をすることが重要と考えます。

■ グループ

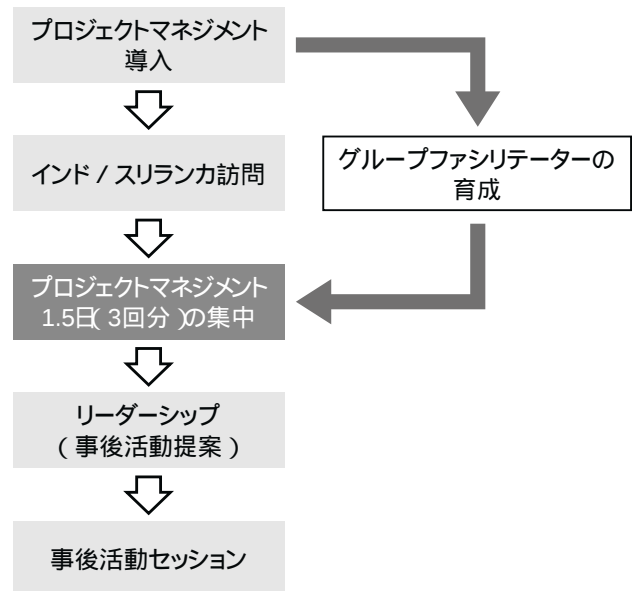
240名のPYは10名程度を基本とするプロジェクトマネジメントグループを作る必要があります。レター・グループを二つに分けても良いかと思います。この10人程度のグループには本事業の趣旨からOPYとJPYを含めて構成されるべきです。

■ ファシリテーター

今回の反省から、グループの議論を進め、調整する「グループファシリテーター」の役割は大変重要と考えます。今回、その役を担うだけの経験と適性を持ったJPYもOPYも多くいたように思いますが、十分にその力を発揮してもらうことができませんでした。オリンピックセンターでの研修から、これら力のある「グループファシリテーター」候補者をプロジェクトマネジメント・セミナー委員会メンバーとして、上記「プログラムの構成」の項目で示している集中講義の前に、ファシリテーションの方法や他のPYに先立って、理論を理解してもらい、事例の作成や集中研修の支援を行ってもらうのが良いと思います。

6. 最後に

私は、11か国の240名の青年が交流するこのような研修にも、長期の船の旅も初めてで、11か国の青年たちのダイナミックな交流の力に圧倒され、プロジェクトマネジメント・セミナーが当初の意図に沿った効果を挙げられなかったことは残念です。しかし、多くのPYは下船後の活動にプロジェクトマネジメントが重要だとの感覚



を持ったと思います。

船上研修を共にしたこれらの青年の今後の活躍を強く期待すると同時に、アドバイザーとしての機会が与えられたことに対し、内閣府及びIYEOの皆様にご感謝いたします。

各国ナショナル・リーダー評価

オーストラリア

エマ・ウールドリッジ

どんな文化的な体験も、とまどいの感情から始まる

- エドワード・ホール

心からのとまどいとはどんな気持ちでしょうか。それはもしかしたら、刻々と変化していく広大な海の上で、11か国の240人ほどの若者たちと一緒に過ごし、聞こえるのは様々な国の言葉と歌、そして波の音だけ、という場面で私たちが感じる気持ちなのではないでしょうか。この旅はすばらしい冒険でした。でもそれだけでなく、最大の発見というのは、真に多様な文化の中で自分自身のアイデンティティに気付くこと、そして共通する人間性に気付くことなのだとすることを私たちに教えてくれました。

SWY28の冒険が始まる

オーストラリアは、光栄にも今年の次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY28)への参加国として御招待いただき、オーストラリアが参加するのは今回で16回目となりました。参加者は、オーストラリアの事後活動組織の協力を得つつキャンベラの日本大使館によって選考されました。

選考終了後、SWY28オーストラリア代表青年団には準備期間はあまりありませんでした。準備は、この事業の近年の歴史を知るところから始まりました。NLは、SWY15のex-PYであり、さらに前回の「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議(東京連絡会議)や、先日フィジーで行われた「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)のグローバル・アセンブリーにも参加しており、事業に関する近年の変化や、参加者に求められる主な事柄についても説明することができました。

国土の広さを乗り越えて各地に散らばる代表青年団メンバー間での話し合いを進めるため、何回ものビデオ会議を開催しました。地域間に時差があることや、地方での技術設備の問題もあり、このビデオ会議でも活発で流れるような会話をすることはなかなか難しく、メンバー間のつながりを強めるには努力を要しました。2016年が豪日交流基金設立40周年ということもあり、この間オーストラリア政府からも多大な支援を受けました。この支援で私たちは、地元アーティストのデザインによる制服をフォーマル、インフォーマル両方で揃え、オーストラリアの産業に貢献するとともに、その中にオーストラリア

先住民アボリジニの文化やトレス海峡諸島民の文化を反映させることができました。

私たちは、出発前の研修をしっかりと行うために、日本へのお発日の二日前に自費でシドニーに集合することにし、この二日間でお互いに知り合いチームとして活動するための基盤作りをするとともに、SWYに関する事前理解を深めました。事業のex-PYたちとの夕食会も開かれ、ペルー、オーストラリア、そして日本のex-PYが参加してくれました。国際交流基金シドニー事務所の御厚意で、この日1日の場所をお借りすることができました。オーストラリアは、多様性のある国ですし、社会的にも環境に関しても複雑で意見の分かれる問題をたくさん抱えています。ですから、このような問題のことにについて偏らずに気兼ねなく意見を交わすためには、膝を突き合わせて時間を共にし、信頼関係を築き、それぞれの考えや経験を共有することが必要です。そうすることで、チームとしての意見の一致を見出すことができ、国のアイデンティティについてや様々な問題に関する明瞭でしっかりと組み立てられたグループとしてのメッセージを作っていくことができるのです。そのために、今後の事業ではこの部分には二日より多い日数を確保することを推奨します。

この準備期間中、12人のNLたちは非公式な形ながら、それぞれの国のチームの準備に役立つアイデアや使えるツールなどを共有するなど、お互いに協力し合いました。

地球規模で考え、足元から行動する：日本での時間

日本の生活習慣を理解するきっかけとして、SWY事業の重要な要素となっているのがホームステイです。オーストラリア代表青年団は福井県を訪問し、同地でのホームステイを通して「日本文化と日常生活の細微を体全体で感じる」体験をすることができました。天候的には凍えるほど寒かったのですが、福井の人々はとても温かくもてなして下さいました。私たちを御自分たちの生活と御家庭の中に迎え入れて下さった福井の方々に、私たちオーストラリアPYは心から感謝するとともに皆様とのつながりを感じています。この二泊三日は本当に心を揺さぶられる体験でした。福井での最終日の朝を雪景色の中で迎えたことも忘れられません。代表団の多くのメンバーにとって、雪を体験するのは初めてのことだったのです。

私たちは、東京でのガイド付きのツアーや課題別視察も楽しませていただきました。これらの体験は、東京見学や文化に接する機会となったのみならず、私たちが学んでいる事柄が現代の日本の状況の中で具体的に何を意味するのかを現実的、体験的に知る機会ともなりまし

た。両国の外交関係を表すものとしての皇太子殿下の御接見と総理大臣への表敬訪問は、事業中の特筆すべき出来事でしたし、この事業がどれだけ価値を認められているのかを示すものでもありました。

文化に浸る究極の体験：船上生活

にっぽん丸船上での生活は、公式のプログラムで形作られています。まずはグローバルな時代のリーダーに必要な基盤を与えてくれるいくつかのセミナーがあり、その主なテーマはリーダーシップ、異文化理解、そしてプロジェクト・マネジメントです。六つのコースに分かれて行われるコース・ディスカッションでは、PYそれぞれの持つ専門的な能力を現実的な仕方で共有する場がありました。自主活動も、文化理解へと導くさらなる場としてとても人気がありました。活動例としては、語学クラスや伝統工芸、宗教や文化についてのディスカッション、星空観賞会や即興ダンスなどがありました。公式企画に入らない自由時間が、実は最も中身の濃いそして人間味のあるつながりやディスカッションを生み出す時間になりました。オーストラリアの参加青年も、PYセミナーや自主企画で様々な活動やディスカッションのリーダーを務めました。例えば、音楽関係、文化の多様性とアイデンティティ、環境、地球市民、スポーツ、瞑想などです。

オーストラリアPYは、11か国の仲間とそれぞれが友情を育てる中で、文化に関する知識の波をたくさん感じ取りました。これが最もよく表れていたのは、ナショナル・プレゼンテーションでした。オーストラリアのプレゼンテーションは三つの大きなテーマから成っていました。キャンプファイヤー、物語、そして歌です。私たちが目指したのは、アボリジニやトレス海峡諸島民に古代から伝わる知識の集大成や、多様性、多文化主義、場所、大地とのつながりなどに関するメッセージを届けることでした。ナショナル・プレゼンテーションに関連したこの活動は、オーストラリアPY一人一人にとっても、それぞれの持つアイデンティティの感覚を共有し理解することになるとても心に響く体験でした。

寄港地

2か所の寄港地では、陸酔いしたことが興味深い体験でした。

まず私たちが寄港したのは、豊かな音と彩で出迎えてくれたインドのチェンナイです。RGNIYDの若者と時間を過ごして彼ら/彼女らの心からの声を感じ取り、彼ら/彼女らの情熱と思いやりの心に感激しました。つい最近自然災害を経験したチェンナイの街中を歩く中で、自然界における水の力の偉大さと、地域の再生に取り組むコミュニティのことを思い起こさせられました。

スリランカでは、強く思い出に残る歓迎を受けました。また、1日のホームビジットでは御家族の生活に温かく招き入れていただきました。寄港中の見聞や会話から分かったのは、つい最近まで30年にもわたって続いた内戦にもかかわらず、スリランカは平和の価値を理解し、若者への投資の価値を知っているということです。

家路へ

インドで訪問したRGNIYDの校長先生が、こんな格言を紹介して下さいました。

「出会い、知り合うこと、そして別れ。これらは、人間の心の最も悲しい定めだ」

SWY後の人生は大変なものになるでしょう。そこで学びやグローバルな体験を、生活に落とし込む必要が

あるからです。私たちは、地元の日本人コミュニティや事後活動組織、主な関係者や世界的なSWYファミリーを通して学びを必ず還元していきます。オーストラリアは、海外から人気の高い訪問先です。これからオーストラリアを訪れるPYには、是非「ホームステイ + 1」プログラムを提供したいと思います。

シドニーでの出発前研修で、私たちはこんな質問を自分たちに投げかけました。

「あなたの残すSWY財産とは何だろう。」

日本国政府に対する私たちの心からの感謝の気持ちを表す最善の方法は、私たちの今後の行動で示すことでしょう。世界的なSWY財産への貢献として、私たちはこれからも引き続き学びと知識を還元していきたいと考えています。

バーレーン王国

レイラ・アルバルシ

はじめに、バーレーン王国として13回目の参加となるシップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズへの寛大な御招待に対しまして、バーレーン王国代表青年団と同国青年スポーツ省（Ministry of Youth and Sport Affairs）、SWYAAバーレーンを代表して、日本国政府内閣府に心より感謝申し上げます。

地球規模の青年事業である本事業に参加できますことは、たいへん光栄です。私たちは、日本国政府内閣府に対して深い敬意を表すと同時に、バーレーン王国への信頼の表れとしてこのように繰り返し御招待下さることに對して、心からの謝意をお伝えいたします。この御招待は、バーレーンと日本が様々な分野で、特に青年の参加という分野で親密な関係を築いていることの証でもあります。

私は、日本国政府が引き続き世界の貴重な青年層の人材に投資されること、そして訪問国活動の形で事業の海外航路を復活されたことにも感謝いたします。ここ3年間の事業で、JPY向けの海外研修において、バーレーンでの受入コーディネーターを務めさせていただきましたことにも感謝します。今回このようにNLとして参加する機会を賜り、SWY精神を持ち続けることができるのも大きな喜びです。

加えて、団長、管理官、管理部チームの全ての皆様、日本青年国際交流機構（IYEO）、そして船のクルーの皆様にも感謝申し上げます。この事業の成功は、皆様の御尽力のお陰です。私たちに知識を授け、そのために大きな労力を注がれたアドバイザーの皆様、支えてくれた全ての国のNL仲間たち、そして全てのPYにも感謝申し上げます。この事業は、関係した者全てにとって、人生を変える旅であり体験でした。

事業前

参加者の選考が終わり、私たちは事業参加の準備を始めました。最初のミーティングでは、メンバーが初めて顔を合わせ、お互いによく知り合うためにアイスブレイキングをしました。このミーティングの後、3か月の準備期間中に、コーチングやリーダーシップのセッション、チームビルディング、ナショナル・プレゼンテーションのリハーサル、そのほかの活動をしました。ミーティングは、週に3回のペースで行いました。バーレーンは国土が小さいので、皆で集まるのは、それほど難しくはありませんでした。

SWYAAバーレーンと青年スポーツ省が企画した出発前の活動は、チームのメンバーがSWYについてよく理解し、出発に向けてしっかりと準備をするのに役に立ちました。出発前には、私たちは日本国大使にお会いしたほか、青年スポーツ省大臣にも面会しました。これらは、バーレーンにおけるこの事業の重要性を示すものです。

PYに関して、応募資格の最低年齢を現在の18歳から21歳に引き上げることを提案します。これは、ある程度の人生経験を持った若者に的を絞るためです。

日本での活動

オリエンテーションは、必要な情報の詰まった大変貴重なものでした。また都内視察はレター・グループのメンバー同士が知り合い仲良くなるためのとても良い機会でした。都内視察はJPYたちが計画してくれたのですが、とてもよく準備されていて素晴らしい内容でした。本当に感謝しています。この都内視察は、レター・グループのメンバーがよく知り合う機会になりました。日本での活動は、どれもとても良く計画されていました。

自由時間向けに、お勤めスポットのリストと行程の例、交通手段の詳細があると良いと思います。そして、PYが日本のさらに多くの面や場所を見聞する機会があれば、得るものは非常に大きいでしょう。

地方プログラム（ホームステイ）

バーレーン王国代表青年団は、山梨県を訪れる機会を頂きました。メンバーのほとんどが、地元の人々の温かさ、寛大さ、日本のもてなしの精神と文化に感銘を受けました。この機会を更に良いものにするために、事前にホームステイ中の日程案を確認し承認しておくことを提案いたします。

スポーツ・デー

スポーツ・デーは皆の必要としていた気分転換になり、とても楽しい企画でした。管理部の方々が参加してくれたことも、とても良い雰囲気を作り出しました。もう少しチームの結束を高めてからの開催とするために、日付を少し後ろにするのが良いかもしれません。船上でもスポーツ・デーがあると良いでしょう。例えば、ドルフィンホールとスポーツデッキの2か所を会場とすることなどが考えられます。

船上活動

■ ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーション（NP）は、各国代表青年団がそれぞれの国の文化や歴史を紹介するとともに良い機会です。NPには、情報提供中心型からパフォーマンス/ダンス中心型まで様々なスタイルがありました。NPからの学びを最大化するためには、パフォーマンスもありながらその国の文化や歴史に関する深い情報の提供もある形が良いでしょう。

■ PYセミナー

PYの企画するこのセミナーは、様々な話題を扱うもので、いろいろな文化の中の個別の話題に関して詳しく知る機会となりました。ほかの人の持つ文化についてよりよく理解する機会となりました。このセミナーは、是非続けていただきたいです。またその中では、全てのPYがやり取りに加わるようにチャンスを与える必要があるでしょう。

■ クラブ活動

3回のセッションでたくさんのクラブが活動し、青年が積極的に参加する助けとなりました。回数と各回の時間、さらに発表会の準備時間は増やすのが良いと思います。フレキシブルな時間割で、二つのコマに分けてクラブ活動をすれば、クラブを主催するPYも別のクラブ活動に参加できるでしょう。

■ 委員会

委員会活動を通して、PYはそれぞれの担当する活動を管理運営する機会を得、リーダーシップやチームワーク能力を強めることができました。バーレーン青年に関して言えば、それぞれが別々に選ばれたのですが、5人が同じ委員会に属していました。一つの委員会に1か国から加わる人数に上限を設けることで、この状況は改善されるのではないのでしょうか。

■ コース・ディスカッション

担当するファシリテーターの皆様は最大限の力を尽くしていただきましたが、コース・ディスカッションの成果にはいくらかのレベル差がありました。コース・ディスカッションは、本事業の重要な要素になっており、PYが理論的な知識を身に付けるのを助けるとともに、仲間との絆を作る場にもなっています。今後の事業に向けては、ファシリテーターには一定以上の英語力と教授経験があることを基準にすることを提案します。

■ アドバイザー・セミナー

リーダーシップ・セミナーは、PY各自の経験値に応じて学びを得ました。異文化理解は、SWYの基盤を成すものの一つです。セミナーでは各国のPYがそれぞれの価値観や経験を皆と共有することができました。プロジェクト・マネジメントも重要な話題ですが、PYとのやりとりを増やすこと、そしてPYが実際にかかわっている活動について取り扱うことが必要です。

■ 自主活動

PYの心情的なつながりや学びを共有する体験という面で、一番中心的なものとなった活動は自主活動でした。PYが、意見を交換し大切な話題について語り合うことのできる場を作り出していました。また、各国で行われている活動を知る場にもなりました。このような重要性を考慮して、将来的には自主活動の数を増やすことを提案いたします。

■ レター・グループ

レター・グループのミーティングは、PYが互いに知り合う機会となりました。レター・グループでの活動やグループ内での主な話題は担当NLが仕切ったので、グループの絆の強さはNLによりました。

訪問国活動

SWY28の二つの寄港地は、インドのチェンナイとスリランカのコロomboでした。各地での活動や課題別視察は、全般的に学びや得るものがあり、そして楽しいものでした。各国のSWYAAが活動を支えてくれました。ス

リランカでは、地元の青年たちとサッカーの試合をするという特別な体験ができ、絆を育みました。コロンボでのホームビジットもPYからの評価がとても高いものでした。今後の事業でも継続されることを推奨いたします。

終わりに

今回、再びSWY事業に参加させていただきましたことに、さらにNLという立場をいただきましたことに心か

ら感謝申し上げます。この2回のSWY体験から、私は多くのことを学びました。全てのPYたちに、SWYコミュニティの中で活発に活動し、事後活動を通してこのコミュニティに積極的にかわり続けてほしいと思います。

全てのPYのみなさん、このSWYの終了は、地元でそして地球レベルで社会へ貢献していく旅の始まりです。これは本当に貴重な機会です。あなた方全てが、それぞれの国を代表するグローバル大使なのです。

チリ共和国

はじめに

この包括的ですが素晴らしい事業に参加する機会を賜りましたことに対し、チリ代表青年団を代表して日本国政府にお礼申し上げます。今回私はNLとして参加させていただき、各々がそれぞれの分野で卓越したリーダーとして活躍する11名の青年たちと共にチリを代表するという栄誉を授かりました。この事業への参加準備において様々な面で私たちを支援して下さったチリ政府と協賛団体の皆様にも感謝の意を表したいと思います。

この事業は、多くの外国の文化に出会う一つの冒険でした。素晴らしい人的ネットワーク作りができるように計画されており、私たちはそこで出会った人々のことを、これからずっと心の中に抱き続けることでしょう。

出発前活動

チリ代表青年団のメンバーが最初に顔を合わせたのは、10月のある晴天の日でした。その後、毎週末にミーティングを開き、各回4時間ほどの時間を取って、NPやPYセミナー、自主活動など様々な活動の準備をしました。事前に集まることができたお陰で、結束力のある、とても良い雰囲気で行動できるチームを作ることができました。ほかの11か国の前で、素晴らしい国チリを紹介するにふさわしいポジティブな雰囲気作りに、一人一人の個性が貢献しました。

チリ外務省、Imágen de Chile Foundation、在チリ日本大使館、駐日チリ大使、SWYAAチリなど私たちを支えて下さる多くの人々や組織、協賛団体に出会えたことも喜びでした。

皆様の御支援は、私たちチリPYが事業中に多くの活動に積極的に参加するという形で実を結びました。

陸上活動

事業の最初の1週間は、チームメンバー全員にとって感情の大きく揺れ動かされる期間でした。東京への到着から、ほかの国の青年たちとの顔合わせ、そして国立オリンピック記念青少年総合センター（オリンピックセンター）での1週間。この間の講義の中でのグループワー

ユキ・ウチムラ・モラゲ

クやディスカッション、セミナーなどの活動を通して、私たちは様々なレベルで人々とのつながりを作り始めることができました。これらの活動を通して、私たちはお互いの興味や職業、目標などを知ることができたとともに、友情を育み始めることができました。

NLにとっては、さらに特別な記憶に残ることとして皇太子陛下の御接見を賜り、安倍晋三首相への表敬訪問もさせていただきました。

岩手県でのホームステイ

チリPYは、タンザニアPYと共に、岩手県でホームステイをさせていただきました。多くのPYにとって、新幹線に乗ることだけでも新鮮な体験でしたし、日本の文化に直接触れるのは初めてのことでした。タンザニアの青年との絆も生まれました。

地元青年とIYEOによる歓迎はとても心温まるものでした。参加された地元の方々の多くにとっては、外国人と会うのは初めてのことでしたので、地球の反対側からやって来た私たちにとっては、自分たちの文化を紹介するまたとない機会となりました。ホームステイでは、ほかでは体験できないであろう文化的な交流ができました。わずか二泊三日という時間ではありましたが、この間に私たちが受入家族の皆様と築いた絆はかけがえのないものです。私たちは、日本の生活を全身で感じ、日本文化を体験を通して学び、更には地域独特の伝統についても学ぶことができました。

船上活動

船上活動には、コース・ディスカッション、NP、PYセミナー、自主活動などがありました。私たちチリPYは、様々な活動を心から楽しみました。それぞれの活動のファシリテーターやアドバイザーの方々は大変知識が豊富で、青年のより積極的な参加を促して下さいました。

■ コース・ディスカッション

ディスカッションでは、防災から情報・メディアまで様々な話題が扱われました。チリPYは、ディスカッ

ションを通して具体的な技能を身に付けたほか、東京、チェンナイ及びコロomboで、関連する団体などを訪問することができました。最後に行われたサマリー・フォーラムでは、全PYがそれぞれのコースでの学びを共有することができました。

■ PYセミナー、クラブ活動、自主活動

これらの活動はPYによって実施され、各自のリーダーシップや企画力、組織力を高め、またそれらを実践する機会となりました。チリ代表青年団は、ほかの国の代表団と協力して、ダンスクラスやラテンアメリカ文学セミナー、起業セミナー、トレジャーハント、物語セミナーなどを開催しました。

クラブ活動では、踊りや工芸、そのほかの文化的な活動を、参加各国から学ぶことができました。私自身は、沖縄舞踊（エイサー）クラブに所属していましたが、そこでは、踊りについて学べたのみならず、沖縄について学ぶとても良い機会になりましたし、JPYと知り合う機会ともなりました。

■ レター・グループ

事業では、PYたちの交流を促進するために、全参加国のPYが入っているレター・グループというものを作られ、NLたちはそれぞれ一つのグループのリーダーとなりました。事業中、多くの活動や競技などがレター・グループ単位でチームになって行われました。これらの活動を通して、PYの関係が深まり、チームワークが強化されました。私の担当したレター・グループは、スポーツ・デーとプロジェクト・マネジメント課題の2回優勝することができましたが、何よりも重要なのは、これらの活動を通して各国間の強い関係を築くことができたということです。

チェンナイ寄港

チェンナイ寄港中の活動にはカラクシェトラ芸術学院訪問も含まれており、インドの多彩な芸術と工芸を見学することができました。

課題別視察では、訪問地の抱える様々な課題への理解を深めることができました。RGNIYD訪問では、現地の若者との交流もできたほか、各分野の経験豊富な専門家からの学びを得ることもできました。現地の若者と経験を共有できたことは、本当に学びの深い体験でした。

コロombo寄港

コロombo到着に伴って、地元の若者とSWYAAが歓迎のパフォーマンスを披露してくれました。これから私たちがコロomboで体験する、すばらしい経験の幕開けとも言えるものでした。

表敬訪問や、大統領を始めとする政府関係者の御臨席を得た船上レセプションなど、寄港中の様々な場面から、同地のSWYAAがスリランカ政府からどれだけ支持されているかがうかがえました。寄港中の体験は本当にすばらしく、準備のレベルの高さを感じました。

課題別視察に続けて地元家庭への訪問が準備されており、ここでも深い体験をすることができました。地元の村の御家庭への訪問を通して、ここでもまたスリランカの人々の生活習慣を体験させていただくことができました。言語の壁を越える努力をして下さった各御家族の温かさを感じることができました。ホームビジットでのすばらしい体験にも心から感謝しています。

終わりに

今回NLとしてこの事業に参加させていただいたことは、本当に光栄です。そしてチリ代表青年団として経験させていただいた全ての出会いにも感謝します。それは、様々な文化や習慣、感情との出会いであり、そして何にも増してすばらしい人々との出会いでした。チリ代表青年団は事業中様々な活動に参加し、ほかの国々のPYに私たちの国の文化を紹介することができました。それらの機会を与えていただいたことに感謝するとともに、帰国後はSWYAAチリの活動にも貢献すべく、全員の気持ちが高まっています。

PYの文化や背景の違いにもかかわらず、参加各国の間には想像以上に共通点が多いのだということに皆が気付かされました。それと同時に、SWYが精神的な深いレベルでPYを結び付け、国境を超えた家族としての感情を作り出していることにも気付きました。

チームワークを基にした活動と社会活動の最適な組み合わせが、文化の深い理解を得る鍵であり、それらはまた私たち参加各国間の今後の良い関係に必ずや貢献するであろう友情醸成の基礎でもあります。それは、明日のリーダーたちと今できる活動だと言えます。

SWYは、日本国政府内閣府の主催する大変独創的な事業で、そこでは世界各国から参加する青年が、活動を共にし、意見を交換します。この事業は、私たちを個人としてまたリーダーとして成長させてくれただけでなく、これからずっと続く友情とつながりを培う助けにもなりました。インド代表青年団のメンバー全員にとって最も印象深かったのは、この事業の企画と実施のための管理部の献身と膨大な準備です。日本の方々の効率性とプロ意識は、私たち全てが引き続き学びを得たい分野です。同時に、管理部の方々の親しみやすい人柄にも感激されました。団長を始めどなたにでも、いつでも気軽に接することができました。この事業を楽しいものにするべく努力して下さった管理部の皆様に感謝いたします。

陸上活動

一日目のANAホテルでの歓迎会の場から、温かく親近感を感じる雰囲気があり、くつろいだ気持ちにさせていただきました。次の日には、さっそく福井県でのホームステイへと出発しました。私たちインドPYは全員受入家族との時間を本当に楽しみ、あっという間にお別れしなくてはいけないことを心から残念に思いました。伝統的な和紙作りについて学んだ和紙の里会館訪問は、特に印象に残るものでした。私たちはホームステイの二日間に、この事業のほかのどの部分にも増して日本の文化と生活について学びました。そして何よりも重要なのは、日本で私たちの家族と呼べる人たちと出会ったことです。

陸上研修の大部分は、オリンピックセンターで行われました。ここで私たちは、コース・ディスカッションやクラブ活動、セミナーなど事業の様々な要素についての紹介を受けました。事業に参加する仲間と生活空間や設備を共有するなど、多くのインドPYにとっては新しい経験となる生活スタイルについても学びました。そのような場での生活は、私たちにとってとても重要であったと思います。なぜなら私たちは、グローバルなリーダーとして様々な場面に順応することが求められますし、特に多文化環境の中で、直面するどのような状況からも最大限の学びを得ることが大切だからです。

オリンピックセンター滞在中のハイライトは課題別視察と、レター・グループでの都内視察でした。東京の伝統的な面と近代的な面の両方を見ることができるよう、そして効率良く回れるよう考えてJPYが立てた都内視察の計画は、目を見張るすばらしさでした。課題別視察も、テーマに沿った楽しいもので高く評価されています。

船上活動

2週間の陸上活動を経て、私たちはついにつぼん丸に乗船しました。出航の日にはex-PYの皆さんや友人、家族の方々が見送りに来られていて、その場は温かい愛情にあふれ、私たち皆が大きな感慨を味わいました。につぼん丸は、設備が大変良く整った、そして美しいデザインの船です。この長い船旅をPYが快適に過ごすことができたのもそのお陰です。船の快適さのもう一つの要素は、クルーの皆さんです。クルーの方々はどなたもとてもフレンドリーで、彼ら彼女らと接することができたことも大きな喜びでした。

セミナーとコース・ディスカッション

コース・ディスカッションとアドバイザーによるセミナーは、船上での学術的な学びの2本の柱でした。ほかの様々な研修と同じように、これらのコースやセミナーにもアドバイザーやファシリテーターの個性が反映されていました。ですから、そのような講師役の方々の選考は非常に重要な点です。コースやセミナーに関する評価は様々でした。しかしながら、今回のように教育背景や人生経験も様々なPYを対象に講座を組み立てるのは難しいということは、PYも理解していました。チームメンバーの多くの意見として、内容を若干調整していただければより良くなると思います。特に気になったのは、重要度の低い話題に時間を取られて、大切な点が完全に割愛されてしまったことが何回もあったことです。セミナーの中でPYの評価が高かったのは、プロジェクトマネジメント・セミナーの最後の部分で、自分たちで事業を組み立てる時間が与えられた場面でした。グループ・リーダーであった私は、このアクティビティでグループ全員が気持ちを集中させ、力を出し合い、チームワークの中で出合うことになる様々な感情を経験しているのを目撃できました。

PYセミナー

PYセミナーは、担当PYの持つ知識や経験をいろいろな国のPYに伝える機会となっただけでなく、興味の近いPY同士の出会う場ともなりました。ほとんどのPYにとって、実際にPYセミナーを担当するのはかなり思い切りのいるものでした。居心地の良い自分のスペースから外に出て、多様な背景を持つ人たちに自分の考えを伝え、しかもそれらの人たちが寝てしまわないようにする必要があるので、何人かのPYにとっては、英語が課題でした。正しい知識やコンセプトに基づいていながらも、発表には英語の問題が現れていることがありました。

自主活動とクラブ活動

自主活動とクラブ活動は、船上生活で最も楽しい時間の一つでした。これらの活動を通して、私たちは踊りや音楽、食、言語などほかの国々の文化と身近に接することができました。国ごとに企画されたパーティーは、特に印象的でした。というのも、それらのパーティーでは、NPでは紹介されないような各国の気軽で日常的な面を目にすることができたからです。一部のPYが率先してチャリティイベントやオークション、資金集めイベントなどを企画していたのも心温まる出来事でした。インドPYにとって特に印象的だった自主企画は、シェアエコノミーとトランジション・タウンに関するもので、何人かのPYは自分の地域での応用を計画しています。しかし、何と言っても最高の企画は、隠し芸大会的“SWY Got Talent”です。PYの中から、これから世界のスターになるかもしれないすばらしい芸達者たちが現れました。

訪問国活動

訪問国活動として、私たちはインドのチェンナイとスリランカのコロンプを訪れました。これらの場所での活動は、両国の人々の温かさともてなしの心に触れる機会となり、心の温まるものでした。インドでのカクシェトラ芸術学院訪問では、私たちの国の文化を保存促進するためになされている活動に畏敬の念を感じました。RGNIYD訪問も、学生との交流を始め、すばらしい体験でした。PYの多くが、課題別視察はコースの内容と合っていないと感じました。訪問受入国として、この点に関してはしっかりと検討し、今後の事業に反映できるよう提案していきたいと思います。

港での歓迎を始めとして、スリランカで私たちが受けた歓待は言葉にできないほどのものでした。課題別視察もコースに結び付いたもので、よく準備されていました。ホームビジットは短い時間ではありましたがすばらしく、全てのPYが楽しみました。しかしながら、言葉の壁という面では、スリランカは日本以上だと感じたPYもいました。ホームビジット時の活動内容も少し調整する方が良いかもしれません。というのも、御家庭からいくつものお寺へ行って帰ってくるという行程があったため、それだけでなく短い滞在の中で、家族とゆっくりと何か一つのことで時間を取ることができなかったからです。全体として、これら二つの寄港地での時間は、私たち全てにとって本当に思い出に残るものとなりました。

提案

以下にインドPYからの提案を書かせていただきます。

- 全体的にOPYを、文化的にひとくりにまとめて扱う傾向が見られます。しかしながら、実際にはOPYの文化も非常に多様で、時にはほかのOPYよりも日本の文化に近いということもあります。導入フォーラムに似た感じの短い紹介企画を組み入れることを提案いたします。提供されている印刷物に加えて更に各国の文化や伝統を、ほかの国のPYに伝えるというものです。
- セミナーは、いくらかの基礎的なコンセプトの説明を加えて、もう少し簡潔でまとまった形のものにするのが良いかもしれません。リーダーシップ・セミナーと青年起業コースに関しては、何人かのPYが、マーク・ザッカーバーグやオバマ大統領のようなグローバルに活躍する実在のリーダーを例として挙げるとより良いだろうと提案しています。これは、異文化理解セミナーの一つの回で行われた方法です。
- 事業中、1日がスポーツの日として設定されていました。体の健康は、知的向上に不可欠な要素です。事業中に、もう少し多くのスポーツ活動や体を動かす活動を取り入れることを提案いたします。
- セミナーなどで発表者が語学面での問題を抱えている時には、通訳を介すことが良いのではないかと感じています。
- 一つのコマが時として長すぎると感じられました。これをもう少し短くして、現状の10分休憩の前後には異なる内容のものを入れることを提案いたします。
- プロジェクトマネジメント・セミナーで行われたように、PYに課題や企画を与えることはチーム精神を強めたり、リーダーシップの素質を伸ばすのに役立つでしょう。今後の事業では、このような形の活動をより多く取り入れることを提案いたします。

終わりに、このすばらしい機会を与えて下さいました日本国政府内閣府とIYEOに感謝申し上げます。この経験は、既に私たちの人生の一部を形作るものになっています。

次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に日本NLとして参加できたことに、心より感謝申し上げます。第11回「世界青年の船」事業の参加以来、事業には管理部やファシリテーターとして関わってきました。NLとしての体験はそれまでとは異なり、PY一人一人にアプローチし内面的な発展を促す貴重な体験でした。

ナショナル・リーダー

SWY28の日本NLとして、「一人一人が自分の望みに気づき、その実現に対して一歩踏み出せる環境を整える」ということを、SNLと共に目標にしてきました。JPYにビジョンを示しながら、一人一人が自分の心の底からの願いに気づきそれを実行に移せるよう、様々な角度からサポートしました。

各国NLは自国の青年に対し強い責任感を持っています。問題が生じた時は該当国のNL同士で話し合い、互いを尊重した上で解決に至りました。チームとして優れていた点は、PYに対してルールで強制することをせず、自発性を促して自分で行動を起こそうと試みていたことです。そうすることで、PYのリーダーシップの育成に貢献することができました。

優れた参加青年

OPYは経験の幅が広く、大学講師、通訳、医師、カウンセラー、弁護士、税理士、政府職員、国連勤務経験者、NGOや企業の設立者、ガン克服の経験者など、人生経験や専門知識が豊かな青年が集まっていました。それだけでなくOPYには心の知能指数（EQ）の高い人が多く、船上の生活や様々な状況に自分自身をうまく適応させていました。また仲間の性格や気持ちを配慮して、状況に応じた判断を行っていました。

JPYの約80%は学生だったため、コース・ディスカッションでOPYは日本人の理解度に合わせる努力をしていました。彼らはそのような状況を理解し、外国語で格闘するJPYを助けながら公平な姿勢でJPYに接していました。

JPYは人生経験や知識、英語能力でOPYとの差はありましたが、文化や学術、スポーツでは才能を発揮していました。ピアノや書道、サッカー、ソーラン節、茶道、書道などの特技は非言語コミュニケーションの手段となり、OPYとの会話やつながり、友情を深める上での強みとなりました。

OPYは他者を思いやる能力が非常に高かったため、様々な状況を受け止めることができました。JPYは情熱を伝える努力があったからこそ、青年同士をつなぐこと

ができました。それら双方の良さにより船上では互いに助け合う関係性があらゆる場面で構築されました。これは今回の事業で最も素晴らしい出来事の一つです。

参加青年の才能をいかす視点

PYは、様々な分野で経験を積んだ専門家の集団と言えます。セミナーや他の機会など、事業期間中にPYから学ぶ機会がもっと増えるといいと思います。また事業後PYたちが講師やファシリテーターになる機会が増えたら素晴らしいです。

PYセミナーは青年同士が学び合い、自分で選ぶ課題について発表できる良い機会です。ここでは事前に発表者に対してワークショップを開催し、英語の効果的なプレゼンテーションの方法やメディアの活用方法について学ぶ機会を作ることを提案したいです。また経験のある実行委員やアドバイザーが、良いプレゼンテーションの作り方や英語での話し方についてアドバイスをすることも大切です。

瞬間からの学びと柔軟性

JPYは何よりも優先して準備に時間をかける傾向があります。準備は大切な一方で、一瞬一瞬に意識を置き、その場で起きる予期せぬ事態から学ぶことは、私たちにとても大切なことです。これこそ、事業で経験できる醍醐味です。

この傾向を配慮し、JPYは準備に時間をかけすぎず、限られた時間の中でPYと共に過ごす時間をより大切にすることを、事業として積極的に促していただきたいと思います。また委員会等の準備はJPYの事前研修では時間をかけすぎず、委員会活動そのものをOPYと合流後に開始することを提案します。

また、状況に応じた柔軟性や対応能力もグローバルリーダーにとっては重要です。例えば、クラブ活動の中で最も人気の高かったニュージーランドのマオリ族の伝統を教えるハカクラブでは、その活動内容は乗船後に決まりました。このニュージーランド青年のような臨機応変さは、グローバルリーダーが学ぶべき能力の一つです。

「次世代グローバルリーダー事業」の参加者における現象

前述のとおり、OPYとJPYの間には人生経験や知識において大きな差があり、様々な場面で明らかでした。なぜそのような違いが生じたのでしょうか。OPYからの意見と私見から理由は二つ挙げられます。

まず一つ目に、JPYとOPYでは、事業に対する期待が応募時点で若干異なっていたことが挙げられます。JPY

はこの事業を「国際交流や異文化理解を通してグローバルリーダーを育成するもの」と捉えていた一方で、OPYは「次世代のグローバルリーダーを育成する事業」というタイトルや自国の広報内容から、この事業を「世界中の青年と世界規模の重要課題を討議するハイレベルな場」として捉えていました。

二つ目に、OPYの質が飛躍的に向上したことが挙げられます。これまで内閣府や一般財団法人青少年国際交流推進センター、日本青年国際交流機構の努力の成果として、各国の事後活動組織や広報活動が強化されました。その結果、海外では事業の認知度が高まり応募者数が増え、必然的に競争率が上がりました。例えばスリランカでは、本年度の事業に約1,000人が応募し、12人が選ばれました。

このように、JPYとOPYにおける参加者の性質と経験に大きな差があること、参加者になるための競争率が国によって大きく異なることが分かりました。

「次世代グローバルリーダー事業」の今後に向けて

この事業の質と存在意義を高め、世界に誇れる事業にすることは、日本人そして世界に対する日本としての貢献につながります。そのためには、全てのPYの様々な視点からのニーズに応えることが必要です。もし今のようにJPYとOPYの間で人生経験や知識、英語力に差がある状況が続けば、OPYの期待を満たすことができず参加者の質が低下し、事業そのものの質の低下につながりかねません。

日本国政府の事業であるからこそ、日本やJPYに有益な事業であるべきことは言うまでもありません。しかし

同時に、PYの半分の人数を占めるOPYの満足度を満たすことは、グローバルな取組である以上、大切なことです。そのためにJPYの応募者については社会経験や人生経験のある応募者を増やすこと、そして競争率を上げることが提案したいと思います。そうすることで事業の質が保たれ、国際社会に貢献するより実施有効性のある事業として、この事業は存続するのではないかと思います。

心から感謝

自分が心の底から思う「本当にやりたいこと」は世界に一つだけしかなく、その想いを実現することが自分の幸せであり、世界への何よりの貢献かつギフトであること。また、既存の選択肢から選んで行動するより、自分にしかない心の底から湧き上がる希望を行動に移すことが今、最も大切であるということ。これらについてJPYに一人一人に伝え、意識を高めさせ、行動に移す勇気を与えることができ、自分にしかできないこの役割を果たせたことを心から嬉しく思います。

いつも心を開いて対応してくれたJPY、OPY、そしていつも見守り支援してくださった管理部の皆様、充実した訪問国活動を準備してくださったインドとスリランカの政府及び事後活動組織の皆様、日本青年国際交流機構と一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様、事業を可能にくださった日本国政府及び国民の皆様、信頼とサポートの関係性の中で、チームの団結力を強めてくれた教育コースのファシリテーターのポール、そして同じビジョンを掲げ、信頼して私と共に歩んでくれた日本SNLの井手さんに心から御礼申し上げます。

日本国

SNL 井手 宏臣

はじめに

本年度は3年ぶりに海外航路への復帰を果たし、名実共に国境のない公海上が舞台。全てのPYが互いの経験や文化を持ち寄り、グローバルリーダーとしての学び、生涯続く人的ネットワークの構築を実現しました。

この成功は、内閣府の皆様・日本青年国際交流機構の皆様・管理部の皆様・アドバイザーの皆様、にっぽん丸の船長及びクルーの皆様、インド政府の皆様、スリランカ民主社会主義共和国政府・ホストファミリーの皆様及び事業を支えてくださった全ての皆様の御支援によるものです。JPYを代表して厚く御礼申し上げます。

本事業に対する評価・提言

事業の更なる発展に貢献することを期待し、私の視点から三つの点を詳述させていただきます。また個別の事項に関しても付記します。

1. 事後活動組織の国際的価値

本年度は訪問国活動のためチェンナイとコロンボを訪問しました。内閣府青年国際交流事業の事後活動組織が中心となり、ユース・リーダーとして活躍するex-PYが私たちを受け入れて下さいました。盛大な歓迎、訪問活動の円滑なサポート、事後活動内容の共有等を通じ、PYは本当に貴重な支援を頂きました。

またex-PYの各方面での活躍を知るにつれ、昭和34年以降脈々と築かれたこの強固な事後活動組織が、日本及び世界の社会貢献基盤となりうる優れた財産であることを再確認致しました。この事後活動組織の価値を高め、社会への貢献能力を向上させ続けることが、ex-PYとなる我々の重要な使命です。

2. 立体的な議論の深化

各講座の質の高さに加え、一つの学びから連鎖的に議論を深める立体的研修構成は特筆に価します。

例えば、セミナーで「問題解決の衝動」というリーダーシップの源泉に関するアイデアが共有されると、実務経験を積んだ各領域のファシリテーターが「衝動と起業」という内容で発展的にコース・ディスカッションを運営。その夜のプライベートな会話でも「自分の衝動」を深夜まで語り合う等、議論が連続的な深化を見せます。このような議論が、難民問題・社会起業・ワークライフバランス等、多種多様な話題に対して起こり、PYが眠る時間を惜しんで議論をしていたことを共有しておきたいと思います。

3. 有機的なリーダーシップの育成

異なる個性に敬意を払いながら、個々人が持つ強みを絶妙なタイミングでいかし合う出番型リーダーシップ。掲げた目標を具現化するための世界水準のプロジェクトマネジメント手法。相違する価値観の先にある成功を目指す異文化理解。そしてリーダーに求められる強い精神力を養うサイコロジストのアドバイス。これらが有機的に調和する育成プログラムを通じ、PYは多面的な成長機会を得ることができました。

個別の事項について

■ 事前研修

日本代表団にとって、意見の対立による停滞などを事前に体験する貴重な機会でした。また結束を高める好機となりました。

■ ナショナル・プレゼンテーション

各国の魅力や社会問題が明快にまとめられ、文化・宗教・政治・社会的な背景を学ぶ非常に有意義な時間となりました。

■ 訪問国活動

インド・スリランカともに深い学びを得ることができました。現地の青年との議論時間を増やせば、より有益な訪問になると思います。

■ PYセミナー

各PYが自らの専門領域をいかし「スポーツによる犯罪抑止」「難民の受入れに関する議論」等、有意義な議論をリードしました。

■ NL間の協力

参加者全体の士気の向上、運営上の問題発見・解決に挑戦。PYのために時間と労力を使い、サポートを行った各国のNLに、改めて敬意を表したいと思います。

■ 事後活動研修

事業で得た経験を社会へ還元する方法について議論されました。日常活動から大規模イベントまで活発に議論されました。

最後に

未来は不安定で変化が激しい。先が読めず不確実性が高い。複雑で曖昧模糊としている。そして、あまりにも複雑すぎる。だから、たった一人のリーダーが解決できる問題は少ない。こうした世界で私たちはどのようなリーダーシップの育成を目指すべきか。この点について、事業の本格開始前にSWY28で大切にしている価値観について日本NLの鈴木美穂氏と幾度も議論しました。結果、私たちはNLが強力に牽引するのではなく、各PYの「やりたい」という気持ちをサポートする環境作りに徹し、各人のリーダーシップの背中を押すことをミッションとしました。幸いにも、理解ある団長及び管理部の皆様、非常に近い価値観を持ち力強く支えてくださったアドバイザーの皆様、そして、日本代表団を深い愛情で包んでくれた全PYの支援によって、当初の目論見を達成できたと思います。SWY28関係者の皆様に、重ねて、御礼を申し上げて結びの言葉とします。

メキシコ合衆国

SWYでの経験は、簡単に要約するにはあまりにも内容が濃くそして幅広いものでした。47日間に経験した感情と得た学びは、言葉では説明し切れないほどのものです。そのような体験ではありますが、この事業が特別で独特な学びの場であり、共有の場、そして世界を変えるために必要な新しいリーダーシップのビジョンを形作る場でもあることを説明するために、以下にそこでの主要な出来事について記すことにいたします。

ホセ・ルイズ・フェルナンデス

参加青年選考過程

メキシコ代表青年団にとっての事業は、SWYAAによるPYの選考から始まりました。まずは、NLが選考され、そのNLが全国の選考過程をコーディネートしました。2015年の選考は、これまでのメキシコのSWY参加の中で最大規模のものとなりました。選考過程は4段階に分かれ、11名の枠に対してメキシコ全国から1,313名の応募がありました。SWYAAメキシコは、参加者の多

様性確保と、選考過程での様々な活動への応募者の参加利便性を考慮して、メキシコ国内の4か所（北部、中部、西部、南部）で選考を行いました。選考には、書類審査、英語能力と日本及びメキシコに関する一般教養筆記試験、各選考会場周辺で行政や民間団体と共同で行ったボランティア活動、心理テストがあり、そして最終面接は日本大使館、メキシコ政府青年庁及びSWYAAの担当者によって行われました。これらの過程を経て最終的に作られた代表団のメンバーたちは、多様性に富み、それぞれが青年関連事業や社会貢献事業に取り組むすばらしいリーダーであり、そしてメキシコへの特別な愛情を持った人たちです。以上のように、選考過程においてメキシコのex-PYたちの注いだ努力は特筆すべきものでした。そしてそのお陰で、代表団は才能あるそして献身的なメキシコ青年たちで構成されることになったのです。

事業に向けた準備

メキシコPYは、会場とオンラインそれぞれでのミーティングを含む3か月間の準備過程に参加し、SWYの環境やその背景、事業のガイドライン、そして期待される成果などについて学びました。この期間に、代表団はまたNPの準備をしました。NP準備の中心テーマは、メキシコの真の歴史と現状を伝えること、そして自国の多様な文化を伝えることでした。事前課題は、事業の中でディスカッションを深めていくことになるテーマに関して、PYの興味と知識を深めるのに大変有効なものでした。私たちのこの経験の陰には、在日本メキシコ大使館からの大きな助けと、協賛組織からの支援があったことも、ここに御報告いたします。

日本到着

到着後の二日間は、日本以外の国のPYたちとくつろいだ雰囲気の中で会う機会もあり、PY同士のつながり作りにも役立ちました。このつながりは、その後のオリンピックセンターでの活動でより強い絆へと高められていくことになります。歓迎会でのスピーチの大役を賜り、PY、政府関係者や招待客の皆様にご挨拶させていただきました。ありがとうございました。

地方プログラム

滋賀県での三日間は、日本の家庭の生活を体験し、伝統や言葉、様々なアイデンティティ表現などについて紹介し合う貴重な機会となりました。その中で、メキシコPYは、日本についての新たな発見も得ることができました。草津市まちづくりセンターで行われた地元の子供たちとの交流は、特に私たちの心に残る充実した経験でした。ここで特に触れておきたいのは、滋賀県知事がSWYのex-PYであり、私たちを大きく勇気付けて下さったということです。特に、事業がいかに知事の生き

方や仕事に影響を与えたかのお話は印象的でした。

陸上研修

8日間の陸上研修から、コース・ディスカッションやセミナーなどが始まりました。三つのセミナーそれぞれの最初のセッションで扱われたテーマは、事業への導入としても、ほかのPYとの最善のコミュニケーション方法を学ぶ上でも大変有効なものでした。特に、異文化理解セミナーとリーダーシップ・セミナーでは、コミュニケーションや人々とのやり取りの方法を知り、それを応用できるよう助けられました。課題別視察は、コース・ディスカッションで話し合っているテーマが、日本社会の日常の中でどのように扱われているのかを知る上でまたとない機会でした。それはまた、行政機関や民間組織、そしてそこにかかわる人々が持っている最良実践事例（ベストプラクティス）や成功例から学ぶ良い機会でもありました。これらに加えて、最初のPYセミナーで、PYが共有したそれぞれの関心事などに接することができたのも興味深い体験でした。皇太子殿下の御接見を賜る機会及び総理大臣表敬訪問は、私たちにとって大きな特権でした。またそれは、日本国政府と日本の方々からSWYをどれだけ重要視されているかをはっきりと表すものでもあります。

船上研修

事業の最も大切な期間であるこの部分が始まる前に、PYは事業の最初の部分で既に不安な気持ちを克服しており、お互いにより本音で話し合ったりやり取りしたりができるようになっていました。日々の全ての活動が、そのセッションで扱われるテーマへのPYの真剣な取組を強めるものになっており、PYはそれぞれの経験やアイディアを共有するよう、またほかのPYがそれぞれの地元で行っているプロジェクトや活動から学ぶよう励まされました。

■ コース・ディスカッション

コース・ディスカッションのテーマは、PYにとって非常に興味のあるものでした。そしてコースのテーマは、セミナーのテーマとも非常に良く関連付いていましたので、事業全体を通して一貫性のある主題を保つことができました。コース・ディスカッションのファシリテーターの方々は大変経験豊富でしたので、PYの体験がより豊かなものになりました。

■ セミナー

三つのセミナーは、どれも興味深いものであっただけでなく、それらからPYそれぞれが地元で関わっている活動やプロジェクトにいかすことのできる新しいツールを学ぶことができたという意味でも大変有益な

ものでした。ここで学んだツールは、どんなプロジェクトにおいても利用できるものです。というのも、セミナーで扱われた三つのテーマであるリーダーシップや、特に異文化間でのコミュニケーション、そしてプロジェクトマネジメントはどんな活動であっても必要不可欠なものだからです。

■ クラブ活動

各国の代表団がクラブ活動として準備したものは、大変興味深い内容で、各国の文化や伝統を理解するのに大きく役立っただけでなく、ある特定の価値を異なる文化ではどのように理解しているのかを知ることにもつながり、結局のところ私たちはそれほど異なっていないのだと気付かされました。

■ PYセミナー

PYセミナーはとても良く準備されていたうえ、各セミナーでは発表者が文化や日常のいろいろな表現をしつかりと紹介しようと努力していたため、事業の中で最良の活動の一つとなりました。セミナーでの様々なアクティビティを通して、参加各国に関する理解が深まっただけでなく、それぞれの社会が抱える課題を新しい視点から捉えることができるようにもなりました。

■ 自主活動

自分の持っている能力や文化、伝統、そして関わっているプロジェクトなどについてほかのPYに紹介するために、これほどたくさんのPYが自由時間を犠牲にしてまで活動するとは驚きでした。どの自主活動も、興味深い話題について知る機会となりました。くつろいだ雰囲気の中で行われましたし、自由にそれぞれの大切にしていることを皆と共有する場になっていました。

■ ナショナル・プレゼンテーション

各国の代表青年団が自国と人々のことを非常に大切に思っていることが、NPにはとてもよく表れていました。発表を見る側のPYが深く感動する様子が見られたのもとても嬉しかったですし、発表を通してPYが参加各国に関するより深い理解を得られたことも素晴らしいことです。

寄港地

訪問の機会を得た国での活動は、それぞれの国の文化や伝統に関するより正確な理解を得る助けになっただけでなく、各国の抱える課題と、人々や政府がそれらの課題にどのように取り組んでいるのかをより深く理解する上でも有効でした。

インド・チェンナイでの寄港は、学びの多いアクティビティが満載でした。その一つがカラクシェトラ芸術学院訪問です。ここでは、インドの色彩豊かで美しい文化表現を体験することができました。RGNIYD訪問も興味深いものでした。そこでは、この学校がインドの青年とどのように活動しているのかを学ぶことができました。

スリランカのコロomboでの体験は、スリランカの人々のおもてなしの心と際立つ温かさにあふれた、言葉ではとても表現しきれないものでした。スリランカ政府とSWYAAの連携もすばらしく、その成果は全てのPYにとっての最高の経験につながりました。地元の御家庭への訪問も、とても心を動かされるものでした。行政のトップレベルの方々の協力があったこともとても素晴らしいことでした。お陰で地元のメディアにも取り上げられ、スリランカ社会での本事業に対する知見も深まりました。

コミュニケーションとPY間のやり取り

JPYの皆さんが、OPYの中に入っていこうと努力し、背景の違いによるコミュニケーションや表現の違いを理解しようとしていたことは、高く評価されて良いでしょう。JPYのこの努力に加えて、コミュニケーションや異文化理解のためのツール習得を研修に取り入れられた事業主催者の御尽力によって、この事業は全てのPYにとって一生忘れることのできないすばらしい体験となりました。

提案

私から一つだけ御提案させていただけるとすれば、それは今後の回においては各国のNLや参加青年の選考に同国のSWYAAがもっと関わるべきだということです。この事業のいちばん大切な要素は人であり、もしもOPYがこの事業の目的や目標を事前により深く理解していれば、今回の事業での経験も、そしてPY各自の持ち帰る成果もより良いものになったであろうと考えるからです。

謝辞

メキシコ代表青年団とSWYAAメキシコを代表して、日本国政府内閣府、管理部の皆様、事務局、ボランティアの皆様、そしてSWY28に関わられた全ての方々から感謝を申し上げます。この体験は本当に素晴らしいものでした。この事業のお陰で全てのPYが、より良い世界を作ることとは可能であり、すばらしい明日は手に入れられること、私たちの望む変化は私たち自身が生み出せるのだということを学ぶことができました。ガンバリマショウ！

ニュージーランド

アオテアロア・ニュージーランド代表青年団とSWY事後活動組織を代表して、この事業に御招待下さいましたことを日本国内閣府に対し心よりお礼申し上げます。

この特別な事業の存続を支え、発展させるために日夜活動してこられた全ての関係各位にも感謝いたします。全ての管理部員の皆様、IYEO役員の皆様、そしてセミナーやアドバイスを担当された皆様、影の支えとして働かれた全てのスタッフの皆様、皆様の献身的な働きなくしては、この事業の成功はあり得ませんでした。

様々なアクティビティ、セミナー、クラブ活動、コース・ディスカッション、そして公式活動の外でのおしゃべりなどを通して、私たちは皆大きな学びを得、成長することができました。この経験は、私たちが今後それぞれの分野で社会貢献を見付け出し実施していくための動機付けと、活動へのひらめきを与えてくれました。

私は、ニュージーランドPYに、SWY28に関して率直なフィードバックをしてくれるように頼みましたので、以下の報告はそのことを念頭に置いて書かせていただきます。

日本での地方プログラムとホームステイ

PYが、SWY28の中で最も価値のある体験の一つとして挙げたのは、この部分でした。日本滞在の初期にホームステイを体験できたことは、日本の御家庭の日常生活に関する基礎的な理解を得るのに役立ちました。

PY仲間との居心地の良い、そして支え合える雰囲気と離れることには当初懸念を感じ不安だったのですが、その気持ちはすぐにかき消されました。三重県到着時のとても温かな歓迎に始まり、素晴らしい食事や出し物に接して、すぐに何か特別な体験をしているのだと気付きました。受入家族の皆様の寛大なおもてなしに、ニュージーランドPY皆が恐縮し心から感謝しました。

この短い期間にとっても強い絆が生まれ、お別れの際にはあちこちで別れを惜しむ涙が見られました。

オリンピックセンターでの陸上研修

その後続く研修の旅路へとPYの準備を整える上で、この研修は非常に大切な期間でした。この研修で初めて全員が顔をそろえたので、PYのワクワクする気持ちもとても高かったです。ニュージーランドチームは、最初のアイスブレイキングを担当したのですが、11か国の皆がお互いにできるだけ早くつながろうとする様が見て取れました。

導入フォーラムは、PYが進行したのですが、各々がそれぞれの分野でどんな活動をしているかを知ることのできるとても良い機会となりました。リーダーシップと

テ・オランガ・ウィテヒラ

異文化理解に関するセミナーの第1回目は、事業の初めにふさわしく有益なものでしたし、その後のにっぽん丸船上での生活全期間を通してとても役に立ちました。

多くのメンバーが、オリンピックセンターでの研修がやや長過ぎると感じ、スケジュールも詰まり過ぎで活動の制限が多いと感じました。JPYを始めほかのPYと知り合えるような自由な時間が少なく、オリンピックセンターからの外出の禁止や就寝時間の設定などに順応するのは苦労しました。管理面からの理由は理解できますが、メンバーは皆、もう少し東京を体験してみたいと感じました。

私個人にとっては、皇太子殿下への御接見と、総理大臣への表敬訪問がこの週の最大の出来事でした。

寄港地

インド、スリランカ両国寄港中のいくつかの活動は、メンバー全員にとって事業での特に大きな体験の学びの場となりました。

メンバーの満足度は、課題別視察やその国での活動の特色の強さなど活動の詳細ごとに差がありました。

チームメンバーからの全体的なコメントからは、インド・チェンナイでのいくつかの活動への不満が見て取れました。特に、課題別視察における講義の時間よりは、教室を出て実際に人々と会うことで、このすばらしい都市を作り上げている人たちや場所のことをより良く知ることができたであろうという声がありました。

カラクシェトラ芸術学院訪問はどのメンバーからも評価の高いものでした。この訪問では、古来の文化や芸能、そして人々の精神性をより深く理解することができました。

チェンナイでは、直前になって想定外のプログラム変更があったのですが、管理部の方々はとても適切にそれらに対応していらっしゃいました。

スリランカ・コロンボでの訪問国活動は、SWY28で最も印象的なものだったと誰もが口をそろえて言います。歓迎式典にはとても大勢のスリランカの方々が参列され、それを見るだけでもこの事業がスリランカにとってどれほど大切なものなのかが分かりますし、私たちが特別な事業に参加していることに気付かされます。私たちは本当に心から楽しみました。訪問中の全ての行事が良く計画され成功裏に実施されました。私たちを出迎えて心からのもてなしをして下さったスリランカの人々が、どれだけこの訪問を支え、それにかかわろうとして下さっているのかは明らかでした。国会議員や大統領が船に来て下さったことも、このことをはっきりと示しています。

課題別視察も、全体的に満足のいくものでした。特にNYSCへの訪問は皆が楽しみました。大規模なコンサートが行われ、その一部にミニNPのようなパフォーマンスが組み込まれました。

全員の意見が一致したスリランカでの最高の体験は地元の家へへの訪問でした。非常に快くそして寛大に迎え入れていただき、頭の下がる思いです。訪問させていただいた全ての御家庭が、予想をはるかに超えるレベルで私たちを受け入れて下さいました。食べ物も本当に美味しかったです。

スリランカでのこのような特別な体験を準備して下さいました各組織の方々に感謝の意を表します。

コース・ディスカッション

コース・ディスカッションは、地域づくり、教育、環境、防災、情報・メディア、青年起業というテーマの下で行われました。ニュージーランドPYは、コース内容やファシリテーターによってレベルに差があるものの、誰もがコースから学びを得たと言っています。私たちの多くは、新しい考え方やコンセプトについて学びましたが、何人かのPYにとっては既に持っていた知識やこれまでの学業の背景から、コースの内容は簡単過ぎるものでした。そのような状況の中で、メンバーの何人かは時としてコース内でリーダーシップを取り、ほかのPYを助けたりもしていました。

ニュージーランドPYは全員、各コースのファシリテーターについて良いコメントをしています。何人かは、具体的な活動案や将来のプロジェクトのアイデアを既に生み出しています。サマリー・フォーラムでの各コースの発表は、どれもすばらしいものでした。

PYセミナー

今回の事業のPYセミナーには、非常にすばらしい様々なテーマがありました。私自身の参加したセミナーはとても良く準備され、発表も上手でPYをうまく巻き込み、情報の提供度も高く、ひらめきを与えてくれるものでした。中でも、「ストーリーテリングの力 (The Power of Storytelling)」と「ペットボトルキャック」という二つのPYセミナーの完成度は想像以上のものでした。

ニュージーランドPYの声をまとめると、PYセミナーは事業中最も価値のある学びの機会の中に入るものだったことでした。SWYに参加するPYの持つ高い能力や知識を考えると、今後このようにPYによって行われる活動を増やすことが良いのではないかと考えます。

ナショナル・プレゼンテーション

これまで多くの時間を企画と練習に費やしてきたので、この日のドルフィンホールでの発表を皆心待ちにしていましたし、やっとほっとできる気持ちでした。自国の美しさを紹介するだけでなく社会の抱える課題や問題にも触れるものとなり、発表国のメンバーにスポットライトが当たり、それぞれが感動と誇りを感じる時間となりました。

各国の文化や伝統、生活習慣などを深く知るという意味では、事業の中でこれが最も情報に富んだ企画の一つだったと感じました。

計画と練習に費やした多くの時間や努力の結果を見ることができたのは、大きな喜びでした。

提案

- 可能であれば、ホームステイなどで訪れる訪問先で地域の事業のお手伝いをし、何らかのお役に立てると良いでしょう。
- オリンピックセンターでの研修が詰まり過ぎで、各国間のつながりを作る時間が十分に持てなかったというのが、メンバー間の一致した声でした。陸上研修中に自由時間が交流の企画をもう少し多く設定すると事業に良い効果をもたらすでしょう。
- 最高の学びは、セミナーやワークショップ、クラブ活動などPY自らが発表者やファシリテーターになって、リーダーシップの能力を示す機会が与えられた時に得られました。この種の活動を増やすことを提案します。
- 事業期間中の休日と休日の間隔と、その間の活動の多さが、多くのPYの参加の質に影響し始めていました。事業の目指すものを達成するのに必要なエネルギーレベルを、PYも管理部門も全員が保てるようにするために、あと何回かの休日の設定を検討することができないのでしょうか。
- PYの専門性のレベルを考慮し、PYがやりがいと今後へのやる気を感じられるレベルの内容を扱っていただければと思います。この事業には、世界中の最も能力の高い若者たちが集まっています。それら全ての若者が輝くための機会を与えることが、事業の成功へとつながるでしょう。

最後になりますが、ニュージーランドPYと事後活動組織を代表して、今回のSWYに参加する栄誉を賜りましたことに改めて心より感謝申し上げます。これからも皆様と連絡を保ち、友情とネットワークを培っていききたいと思えます。そして、できるなら遠くない将来に、寄港地の受入国として皆様をお迎えできれば幸いです。

キアオラ、ありがとうございます。

ロシア連邦

はじめに

ほかに類を見ない本事業に参加する機会を賜りましたことに対し、ロシア代表青年団とSWYAAロシアを代表して、日本国政府内閣府に心より感謝申し上げます。また、このSWYの遂行に御尽力下さった管理部の皆様、IYEO、ボランティアの皆様、インドとスリランカのSWYAA、そして特別ゲストの方々など全ての皆様にもお礼申し上げます。

陸上研修

全PYは、オリンピックセンターで顔を合わせ、オリエンテーションとアイスブレイキングに参加しました。ここオリンピックセンターからSWYの活動が始まりましたので、PYにとっては事業への導入としてとても大切な期間でした。大都市東京の真ん中に居ながら、オリンピックセンターから出ないでいるというのはかなり精神力のいることでした。

私は、安倍総理大臣への表敬訪問で代表スピーチをする機会を頂きました。心より感謝しています。皇太子殿下の御接見を賜りましたことは、NLとアシスタントNL（ANL）にとっては特別な機会となりました。

日本でのホームステイ

私たちロシアPYは、バーレーンPYと共に、山梨県での忘れられない三日間を過ごしました。ほとんど全員が、今でもこの三日間が事業全体の中で最高の時だったと感じています。この経験を通して、私たちは日本の文化や伝統をじっくりと感じ取ることができました。

うわさに聞いていた日本の「おもてなし」を受け、まるで家に居るかのような心地良さを味わいました。PYと受入家庭の皆様の間に、こんなにも強い絆がたった数日で結ばれるとは、本当に驚きです。私たちはそれぞれ、受入家族の皆様に再び会いに来るつもりですし、また皆様のロシアへのお越しをお待ちしています。

船上活動（PYセミナー、クラブ活動、パーティー、自主活動）

船上研修中には、PYセミナー、自主活動、クラブ活動、隠し芸大会、ゲームなどPYによる様々な活動が行われました。私たちの多くは、これらの活動を実施する中でマネジメント能力やリーダーシップを実践しました。また、これらの活動を通して、私たちの文化を紹介することができ、様々な分野に関する知識も共有することができました。船上活動は、PYの能力を最大限に引き出す場となりましたが、いくつかの企画では準備が不十分だったため、参加意欲をそいでしまっていました。

アリーナ・ロットウフリーナ

更に大切なこととして、自主活動やPYセミナーの予定は最初から設定されていることが望ましく、事前に頂く小冊子にも記載されているべきです。そうすることで、事前にPYの心の準備ができるでしょう。

ナショナル・プレゼンテーション

各代表団にとって、とても重要な企画となったのがNPです。ロシアは非常に広大な国であり、多様な文化と伝統が存在します。ですので、この多様性を紹介する方法を見付け出すのはとても大変でした。私たちのNPでは、短い劇の中に歌と踊り、そして映像などを取り入れて、各メンバーの出身地である九つの地域について紹介しました。各メンバーが、それぞれの地域を上手に紹介しようと一所懸命準備したお陰で、私たちのNPは大変うまくいきました。NPを通して、私たちは全ての参加国についてたくさんのことを学ぶことができました。

コース・ディスカッション

PYたちは、六つのコースに分かれて活動しました。各コースには一人のファシリテーターが付きましたが、ほとんどのファシリテーターはex-PYで、ファシリテーション経験もとても豊かな方々でした。

PYは、コースごとに日本、インド、スリランカの3か国でそれぞれ1か所ずつの課題別視察を経験し、訪問後にはそこでの学びについて振り返りをしました。

サマリー・フォーラムでは、各コースでの主な学びと成果をPY全員で共有するとともに、事後活動に向けての意気込みを発表しました。

レター・グループ

私たちがとても多くの時間を過ごしたのはレター・グループでの活動でした。グループの雰囲気は、グループリーダーによってかなり違いましたが、どのグループも仲が良く居心地の良い雰囲気を作り出していました。チームの和作りのゲームをたくさんしました。レター・グループは、忙しい日程の中で誰もがリラックスし息つくことのできる場となりました。私の所属したレター・グループでは、メンバー間の強い絆を作り出すことができました。レター・グループには、全ての参加国から最低1人のPYが加わっていましたので、私たちは全ての参加国の人と絆を作ることができたということです。

訪問国活動

訪問国活動を通して、PYはインドとスリランカで体験から学ぶ機会を得ました。それぞれの国からもPYが事業に加わっていたことで、私たちは言語や文化、生活

様式などそれらの国のことをよりたくさん学ぶことができました。訪問国活動は、事業中のほかの活動とはとても違って、事業の重要な要素となっています。

インドでは、チェンナイを訪問させていただきましたが、同市は世界一混雑した市とも呼ばれています。チェンナイでは、古典舞踊古典音楽の学校カラクシェトラ芸術学院を訪問しインド舞踊などの芸能を見学しました。RGNIYDでは、インドの先進的な若者たちと会話する機会を得ることができました。

スリランカでは、全PYがホームビジットをさせていただき、地元の生活スタイルを体験することができました。NYSCと現地政府の堅実な働きのお陰で、全ての活

動を楽しませていただくことができ、私たちは特別な来賓のような気分を味わいました。歓迎式典では大統領にもお会いすることができましたし、首相公邸で夕食をいただきNYSCの美しいコンサートホールでの本格的なパフォーマンスも楽しませていただきました。

終わりに

世界各国の青年間の相互理解と協力関係を醸成するための鍵となるのは、青年リーダーを対象とした教育事業と文化交流事業です。参加青年相互の学び合いと寛容や尊重の醸成は、国際社会の全ての領域で協力関係を強めるものとなります。ロシア代表青年団を代表して、本事業の今後の発展と成功を祈念いたします。

スリランカ民主社会主義共和国

はじめに

このたび寄港地受入国の役を賜りましたこと、さらにスリランカを平成27年度次世代グローバルリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」(SWY)にお招き下さいましたことに対しSWYAAスリランカを代表して、日本国政府とIYEOに心よりお礼申し上げます。

選考過程

SWYは、「一期一会」つまり一生に一度の機会であると言われています。SWY14のex-PYである私にとって、今回SWY28のスリランカ代表青年団のNLに選ばれ、再びこの事業に参加できたことは大きな喜びでした。2015年8月13日NYSCの協力の下、在スリランカ日本国大使館でNL選考面接が行われました。その後、主要新聞にSWY28参加者募集の案内が掲載され、スリランカ各地から1,000人近い応募がありました。全応募者が適性試験を受け、その中で成績の上位者が面接試験を受けました。面接試験に臨んだ応募者には、コロボ大学やケラニヤ大学、モラトゥワ大学、サバラガムワ大学など、スリランカのいくつかの大学の学生も含まれていました。面接には、在スリランカ日本国大使館、NYSC及びSWYAAスリランカの代表が当たりました。私は、自分のチームのメンバーとなる人たちの選考にオブザーバーとして立ち合いました。

出発前研修

選考過程は上記のとおりですが、ここではスリランカPY向けにNYSCの企画した出発前研修についても触れておきたいと思います。研修は、日本国大使館の方をお迎えしての開会式から始まりました。当日PYには、「青年の社会貢献」というテーマでボランティア活動

ハサンティ・プラハルシャ・ウィタナガ

に従事するという課題が出されました。私たちは1週間後に再度集まり、ボランティア活動の案を話し合いました。出された案は、献血キャンプ、学童向けの喫煙・アルコール飲料の影響に関するセミナー、インドゥルワにおけるバレーボールコートの建設、農村の学校での英語キャンプ、タイボンガル祭りをお祝いするための企画、海岸保全プロジェクト、そして老人ホームのお年寄りの巡礼のお手伝いなどでした。

第3回目は、バタンガラにあるNYSCの研修センターでの四日間の合宿研修でした。この研修施設はコロボから40キロほど離れた所にあり、外部との通信も限られていました。研修は午前6時に始まり、夜の10時まで行われました。軍での研修に似たものもありましたが、私たちは時間を守ることから相互理解、スリランカの抱える課題など多くのことを学びました。研修の主な構成は、講義、アイスブレイキング、ディスカッション、チームの和作り、そして余興の時間でした。事業のex-PYという立場から見ても、にっぽん丸船上と似た雰囲気を作り出そうとしたNYSCの取組はとても建設的で効果的でした。お陰で、この研修が終わった時には、スリランカPYは全ての面で十分学びを得、自国を代表するという面で知的肉体的そして精神的に準備を整えることができました。

地方プログラム

私たちスリランカ代表青年団は、ほかの団よりも一足早く東京に着いたため、1月14日に自由時間があり、北浦和と秋葉原へ行きました。日本の電車での移動の方法を学ぶことができたのは、とても良い経験でした。SWYは1月15日内閣府で公式に始まり、オリエンテーションで、管理官、団長、アドバイザー、管理部員の皆様、NLが紹介されました。さらにPYは、事業について